



330
120



始



338-120

2
髮



349 p

著 袋 花 山 田





髪

これから避暑客がぼつぼつ来やうとする頃かなり大きな靴
を携へた三十七八の紳士風の男が町から中禪寺の旅館へと送
られて来て湖に面した八疊の間に通されるといきなり手を鳴
して番頭を呼んだ。

「何處か此處等に静かな別荘の間の空いたのはないだらうか。

少し長く居たいと思ふんだが……』

『へ、へ、』

番頭は客の瘦せた蒼い興奮した顔をじろじろと見ながら揉
手をして、『手前共の持つて居ります別荘がいくらも御座り
ますので……へ、へ。別に一軒離れた家も御座います。夏分混
雑致します時には、御客様に御願ひして一組二組一緒に入れて
戴くことも御座りまするが、常節では滅多にさういふことは御
座りません。へ、へ。どうかごゆるりと……』

かう言つて行掛けたが、鳥渡立留つて、

『何れおつれ様が御座りまするので？』

『イヤ、一人だ』

かう言つた客の顔は俄かに曇つたやうに見えた。

湖の畔には、別荘風に建てた家屋が幾軒もあつた。西洋人を
相手にするやうな大きな家では、チャンと戸が明け放されて、岐
阜提燈などが軒に吊されて、籐椅子が置いてあつた。何の間か
ら湖水が見えるやうな家のつくり方で、深く生茂つた山毛櫨
の林には、前に展げられた湖水が静かな光を反射させた。

男のバナマ帽と番頭の肥つた姿とは、少時して其湖畔の路に
見えた。男は黙つて番頭の後に跟いて歩いた。番頭のいろい
ろに説明するのをフムフムと言つて聞くばかりで、別に何も言
はなかつた。見て廻つた二三軒の別荘には、氣に入つた間がな
いらしかつた。『もつと狭くつても、好いから静かなところ』か

う言つてはつまらなさらな顔をして出て来た。中宮祠の前では何か思ひ出したやうに立留つて先に番頭のグングン行くのも知らずに、じつと湖水を見詰めて居た。

湖は今鏡のやうに澄んで、午後の鮮かな日影が其の半面を照して居た。空気の加減か、それとも水の深淺の加減か、濃い碧と深い藍とがくつきりと線を引くやうに限られてあつて、白堊や赤い煉瓦を點綴した對岸は、丁度明るい水彩畫のやうな色彩を見せた。

然しその明るい風景が男の氣に入つたとは見えなかつた。かれはやがて同じ調子で番頭の後に跟いて歩き出した。番頭は杉の木蔭に立つてそれを待つて居た。

湖を縁どつた路は屈曲して、若い灌木の林やら草藪やら熊笹の繁みやらが續いた。山毛榉や檜の大木が深い涼しい蔭をつくつてゐる間には、塀を廻した閉ぢられた大きな別荘があつたりなどした。一ところ湖水の見える汀には新しいペンキの匂ひのするボウトが一隻繫がれて、明髪綺麗な娘とハイカラな青年とが權を握つたまゝ、涼しい風に吹れてゐた。

「此處は家の所有ではありませんが、静かなことは極く静かです」番頭はかう言つて、其向ふにある林の中の小さな別荘に入つて行つた。

涼しい緑蔭とさびしい位静かな四邊のさまとは客の希望を満足させるに十分であつた。かれは其の縁側に備へてある籐椅子に體を横へたまゝ再び身を起さうとしなかつた。其處からは低い草藪を隔て、湖水が一ところ狭く仕切つて見られた。おしろい草や九連草が暗い庭を鮮かに彩つて咲いて居た。

『では御荷物を運んで参りますから』

かう言つて番頭は歸つて行つた。

『一人——やうやく一人になつた』呻くやうに言つた言葉は静かな四邊の空氣に反響してそれがまた元の静かさに戻つた。男の蒼白い顔には、日影を帯びた林の影がナラナラと動いて居

た。

湖水の方からは賑やかな笑声と水を櫂で叩く様な音とが絶えず聞えて來た。汀に居た二人は、樹蔭の涼しいのと人氣のないつと湖水の眺めの好いのとに周圍の世界を忘れて、容易に其處を去らうとしなかつた。

涼しさうなリンネルの服と水淺黄の艶な服と白いペンキ塗のポットとが、籐椅子の客の眼の前を掠めるやうにして通つて行つた。

笑声は猶ほ聞えて來た。

客はヤ、暫く籐椅子に身も心も埋めて居たが、その笑声に心を惹きつけられたといふやうに、やがて身を起して、駒下駄を突

かけて、其方へと出懸けて行つた。

其處では娘は背を此方に向けて、何か頻りに饒舌つて居た。權を手にした青年は此方に向いた顔に笑を見せながら、水に浮いたボウツの軽い動搖の調子を取るやうにして居る。岸には小石が綺麗な水の中に透徹るやうに見えて、漣が刻むやうに微かな緩やかな音を立てた。蔽ふやうに冠さつた深緑からは、明るい光線が處々縞を作つて水に落ちて見えた。

繪のやうな光景に、客は少時われを忘れて立つて居た。これをそれとなく見て取つた青年は、俄かに同伴者を促し立てるやうな態度をして、急いで出發の準備に取かゝつた。やがて岸を離れたボウツは、翼のやうな二本の權を揺かして、軽く水の上を

滑つて行つた。

少時行つた處で、二人は權を留めて、此方を見て何か話をして居た。けれどこれも長い間ではなかつた。金を湧かせた夕日の波に、再び二本の權は光つて、いつか遠く遠くなつて了つた。

番頭と女中とが小僧に車を挽かせて、靴やら寢道具やらを運んで來た時にも、客は矢張藤椅子に體を横へて居た。火鉢や鐵瓶や、茶道具や、さうしたものはすべて女中が壁に傍つた屏の中から出して、綺麗に掃除して、順序よく並べ立てた。勝手元には桶を渡しさへすれば、綺麗な水が山からいくらでも來るやうになつて居た。

若い肥つた女中は、手拭を被つて、彼方此方と拂塵をかけたなり

拭き掃除をしたりした。庭の古葉を掃いたり草を除つたりすると、あたりは見違へるやうに綺麗な瀟洒した家になつた。

『此處で暫く落付いたら好いだらう』

客は四邊を眺しながらかう思つた。

鞆を明けると、中から書籍やら衣服やらが出た。手帳だの、半紙だの、手紙だのが順序もなくゴタゴタと入つて居た。旅に出やうとして慌て、これを詰めた時の心持がすぐ思ひ出された。殆ど通るゝやうにして、かれは其處から上野の停車場に急いだ。それから此處まで来る長い間、かれは唯後腦を汽車の窓に

寄せかけて居た。汽車を下りてからも車夫の言ふなりに、晝飯を食つたり旅店に休んだりして遣つて來た。

廣い野中の百姓家や、杉並木や、烈しく泡立つた溪流や、ぞろぞろ通る遊覽者の群や、さういふものは唯現象としてかれの眼前を通つて行つたばかりであつた。頭腦はガランとして居た。

『まア暫くじつとして居やう、此處にかうして居たら、自己に打克つことが出来るかも知れない』

かれはまたかう思つて見た。

その打克つべき自己、それが今は自己ではなくて、恐るべき他の人間か何ぞのやうに思はれ出したのは、もうかなり長い前のことであつた。自分で自分を何うすることも出来ないやうな

境遇にいつかかれは其身を置いて居た。

靴の中に束になつた手紙がはいつて居た。ふとそれがかれの眼に留つた。見馴れた封筒に見馴れた筆蹟腹立しいやうな懐しいやうな氣がしたが、それでもそれを手に取つて見ぬ譯には行かなかつた。

……………これも皆貴郎のお蔭と心から喜んで居ります……

……………此頃は久しく御目に懸りませんが御機嫌は……

……………私の心

ナラナラと眼を掠めて通つて行くさうした文句平凡なこの文句にも針でさゝれるやうな烈しい刺戟を感じて、かれは急いで、それを揉み集めて奥の方に押込むで了つた。

『もう何も彼も忘れて仕舞はなければならぬ』

かれはかう口に出して言つた。

雑誌を読みかけても意味が十分に頭腦に入つて來なかつた。で、かれは立上つて小さい庭を彼方此方と歩き始めた。女中は一人残つて頻りに庭を掃除して居た。紅入メリンスの帯はその若い娘姿を一層無邪氣にして見せた。客はじつとそれを見た。何かやさしい言葉をかけてやりたいと思つた。しかしさうした氣分にはなれなかつた。

『何か御用は御座いませんか』

かう言つて臙で女中は歸つて行つた。

其姿が草藪の陰の路にかくれて見えなくなるを見送つて居

た客は、一種譬へ難いさびしさの烈しく、胸を衝いて來るのを覺えた。一人！唯一人！

自から好んで遣つて來たとは言ひながら、このさびしい世離れた林の中に、かうして一人住はねばならぬことを考へると、これは堪らなく悲しくなつて來た。

今更にかれはまたも藤椅子の上に身を横へてじつとしてゐるより他に仕方がなかつた。

前の路をそれでもをりをり人は通つて行つた。奥の温泉場に米味噌を運ぶ女馬の群だの、赤い蒲團に客を載せた山駕籠だの、尻端折をして歩いて行く都の旅客などが通つた。湖水は今燃えるやうに夕日に輝いて居た。

『思ひ切りさへすれば好いんだ。』

かれはこれまでも幾度となくかう心に向つて言つた。そして其獨語はいつも跳ねかへつた鞠のやうに強くかれの胸に戻つて來た。『賣女！無節操！虚偽の塊！』かう極端に女を罵つて見ることもあつた。時にはまた其の鋭い判断の斧を自己に向けて、『馬鹿な奴だ！意氣地のない奴だ！これだけのことが思ひ切れないのか？』かう強ひて自己を冷笑して見ることもあつた。

けれど自分ながら不思議に思はれるほど、その罵倒や冷笑に

は力がなかつた。女に對する心がいつもすぐ傍からそれを裏切つて行つた。「今頃は何うして居るだらう？ 何と思つて居るだらう？ あゝ思つたのは自分の無理ではないか。誤解ではないか。……」かう思ふと、自分で自分が自由にならないのが腹立しくなると同時に、いくら深く觸れて行つても、遂にその核心に達することが出来ない性の相違が呪はれて來た。

『何うせ女は女、男は男だ。男の心持が女に解りやう筈がないやうに男にも女の心持は解らないのだ。』

こんなことまで思つて見た。男の心持の解らないといふことが第一に心外で堪らないといふ氣がした。と、悔恨の念よりも一種忿怒に近い情が烈しく胸をついて起つて來た。

『賣女！』

またから罵つた。

それは波のやうに颯つたり沈んだりする苦悶であつた。また何處から來て何處に向つて去つて行くのか解らないやうな苦悶であつた。腹が立てば腹が立つでそれで好い。あさましければあさましいでそれで好い。慙くとも忘れて了ふことが出来るやうな餘地さへあれば好い。それさへあれば何もこんな山の中まで遣つて來なくつても好いのだ。かれは其處まで行くと、いつもハタと突當つた。

かれは忘れる工夫をした。考へない工夫をもして見た。しかし手にした書籍が、いつか其方除にされて頭が逸早く逆戻り

をして居るのに氣が附いては、いつも失望しない譯には行かなかつた。

追憶の数々——中でもフイヨカル・レコレクションが殊にこれの全身を動搖させた。「何うでも好い。男があらうが、——男が幾人あらうが、そんなことは何うでも好い。十にも百にも分け得られる心と肉體、その一部さへ確たる自己の占有物であれば、それで好いぢやないか。無節操でも、虚偽の塊でも、自分に對して居る刹那さへ自分のものでありさへすればそれで好いぢやアないか」時にはこんなことを考へさせるほどその追憶は強い生々とした力を持つて居た。

夕飯は若い女中が運んで來た。茶をつぐまで其處に坐つて

給仕をしてゐたが、纏て洗つた膳や椀を開扉の中に入れて、「お休みになる時分にはまた参りますから」と言つて出て行つた。湖水は今暮れやうとして居た。明るい夕雲に照された水面は次第に錆びた暗い色を帯びて來た。此時彼の眼の前には、都會の町の灯と、電燈の輝いた一間となつかしい眼とはなやかな姿とが歴々と見えて通つた。かれの心は動搖せずには居られなかつた。女は今宵も媚を賣つて居る！

君自然昔は
真の如くならした
得るは、人を
得るは、人を
得るは、人を

ふとかれは眼を覺した。洋燈は机の上に薄く點いて居た。読みながら寢入つた書籍は開かれたまゝ、其處に放り出されてあつた。

絶えず魔はれた苦しい夢、それは裸體の男が裸體の女を追廻したり、可愛い白い乳の下に鋭利な短剣を突き刺したりするといふやうな種類のものであつた。譬へやうもないほど重苦しい心から覺めて、彼は更に一層の暗さと佗しさとを覺えた。

かれはじつとして天井を見詰めた。大きく見開いた眼は、こんがらかつた頭を統一しやうとするやうに、暫しの間瞬もせず

に夜の静かな空氣の中に際立つて見えて居た。夜はしんとして居た。

苦しさうな遣瀨ないやうな長大息がやがて聞えた。

かれは床の上に起上つた。それと同時に大きな半身像は後の障子に黒くぼんやりと映つて見えた。かれはそのまゝ、暗くなり懸けた洋燈の心をねぢつて見た。しかし油がもう残り少なくなつてゐると見えて、ササと厭な音がするばかりで、室はすぐ元の暗さに戻つて行つた。

時計は一時三十分の處を指して居る。樹の梢を渡る風の音が微かに聞える。汀に寄せる湖水の波の音もそれと手に取るやうに聞える。ガサガサと草藪の靡く音もする。

今までもかうしたことがないではなかつた。夜中に眼が覺めて困つたことは幾度もあつた。自分で自分の淺間しさい氣地なさを痛切に考へたのは、殊にかうした時に多かつた。床の上に起上つたかれの姿は、久しい間身揺もせずじつとして居た。

ふと氣が附くと、かれは矢張女のことを考へて居た。男から男へと移つて行く女その移つて行く状態をかれは深く考へない譯には行かなかつた。其度毎に男の嘗めなければならぬ苦い經驗の一つ一つ、それをいつでも鮮かに頭腦に上せることが出来るほど、かれの心は赤く佗しく爛れて居た。

第一に、一人の男から他の男へと移つて行つて、それがいつも

痕跡を留めないやうな女の巧みな態度が、羨しくもあり腹立しくもあつた。で、此處まで來ると、かれの胸は俄かに愼恚の情に燃えて來た。韁を切つたやうにさまざまな記憶や煩悶や懊惱が一緒になつて、凄じい波を揚げた。

かれは堪らなくなつたやうに、再び身を床の上に横へた。此處に來てまで、かうした思ひに惱まされやうとは思はなかつた。かくれ家——人の居ないかくれ家に行つたなら、勘くとも自己の力で自己を押へることが出来る。一步を譲つてそれが出来ないにしても、自己で自己を判断することが出来る。かう思つて遣つて來た。それであるのに………。洋燈は急にササと音を立て、段々暗く暗くなつて行つた。やがて乾いた心が口金を

の處でポツと赤く燃えたと思ふと、黒い油煙が漲るやうにホヤから出た。かれは慌て、ランプを吹き消した。

闇……無限の闇……その中に唇——紅い唇が見えた。

三

夜の明けるを待兼ねるやうにして、かれはステッキを持つて戸外に出た。朝の霧が薄く湖の上にあつた。湖に沿つた道は、梅や山毛櫨の白い幹の並んで立つた林の中へとかれを導いて行つた。

矢張其女が頭を離れなかつた。此夏、一緒に此處に来る約束をして居た。一緒に伴れ立つて静かな湖畔の朝を散歩する筈であつた。中形に鶉の夏羽織意気な丸鬚に長い白い襟足、それを此處に置いて考へたことも一度や二度ではなかつた。しかし今はもう忘れなければならぬ、長い間馴れて来た笑顔も眼

の表情も何も彼も忘れて了はなければならぬ。……むしろそれを忘れる爲め、その傷痕を醫す爲めに、かれは態々此處に遣つて來たのだ。

路は屈曲して續いて行つた。湖水が見えたり隠れたりした。處々に出て居る木の根や石塊、それに躓いて、かれは幾度か前に踏らうとした。それほどかれはそのことに心を奪はれて居た。

『馬鹿な奴だ！ 意氣地のない奴だ！』かれはまたかう口に出して言つて見た。

何故？ 何故かれはかうした心の状態に到達したのか。かうまで離れることの出来ないやうに精神と肉體とをその女の手に捉へられたか。かれはさうなつて行つた順序を考へて

見ない譯に行かなかつた。普通の女として、さうした社會によく見る女として、唯の美しい眉唯の表情に富んだ眼、唯の愛嬌ある、才ある動作を持つた女としてより以上に、別に深い魅力をそれから受けることなしに、長い間淡い關係をついて來て居た。確に淡い關係であつた。女の持つた弱點はいかやうにも分析することが出来るやうな餘裕を持つて居た。それがいつの間にか、その形の整つてゐるか整つてゐないかを判断するに苦むやうな境にまで引張られて行つたか？ またいつの間に、聰明な分析の斧を全く失つて、心と體とをすべてその女に打込むやうになつて行つたか？ かれは平生慤くとも物に熱することの

出来ない冷たい性質を持つて居ることを自認して居た男であつた。事業に死身になることの出来ないのも、中年になつて、親の残した財産を頼りに、文學に美術に政治に多大の趣味と理解とを有して居りながら、何一つ眞面目なことをすることの出来ないのも、皆なその冷たい性質がある爲めだとばかり思つて居た。中心からかれを動かすものなどが、この世の中にあらうとは夢にも思つて居なかつた。

今更に女の巧妙な力といふことが繰返して考へられた。眞實のやうで眞實でない、虚偽のやうで虚偽でない、手管のやうで手管でない其力は、疑つたり悶えたり不安を感じたりして居る間に巧にその獲物を確實にして行つた。女に騙されるといふ

ことではない、女に騙される位ならば、屹度男も女を騙して居る。こんなことを思ふやうになつた時は、もう其の分析の斧が十分に働らなくなつた時であるのを知らなかつたのであつた。かれの頭には、ある時ある處で二人の間に起つたあるシーンが今もはつきりと印象されて残つて居た。女は其時エクスダシイに陥つた様に男の體に取附いて泣いた。眼からは涙が瀧のやうに流れて落ちた。『こんな商賣をして居るものだから、貴郎は信用して下さらない——もう明日からはやめて了ひます。やめますとも』かう言つて、また款款げた。其時庭には月が晝のやうに明るく照つて居た。

其言葉は信せられないにしても、其涙——止度なく落ちた涙

それも虚偽であつたらうか。今でもかれはさう思ふことが出来なかつた。

「女の自由の總てを占有するといふことは、戀する者の満足である。しかし戀するものに取つては、その満足は餘りに貴重なものではなかつた。飽満——其處から戀はいつも滑つて遁げて行つた。」

男を満足させることの出来ないやうな境遇に身を置かれた女、寧ろさうした境遇から——フィツクルな第二の天性を形ちぶくるやうになつた女、それが彼をかう強く引張つて行くにいて、勘なからぬ力を持つて居たことは争はれない事實であつた。底髮に紫紺の袴戀をすればすぐ結婚を急ぐやうな普通な

女であつたなら、かれはさうした深い處まで入つて行かなかつたに相違ない。底が見え透いて興味を覺めて、すぐ其處から引返して行つたに相違ない。

幸か不幸か、其女はかれには解らない謎であつた。逢へば必ず新しい好奇心を惹起させるに足りるやうな複雑した心のスタイルを持つて居た。虚偽と眞實と眞實と虚偽と、それが網のやうに深く織り込まれて、其處に一種名状せられない微妙な空氣を醸して居た。

その空氣の中に咲いた微かな花のにはひ、それがかれを捉へて行つた。

インスタントから起つた苦悶、それを醫すことの容易でな

いのを、彼は歩き乍らつくづくと思ひ知つた。忘れやうとすればするほど、其女は益々かれに近寄つて来た。其影は益々濃くなつて来た。

前に展げられた明媚な湖水、平生ならば、それが何んなに眼を樂しませ、心を悦ばせたか知れなかつた。朝霧の薄くかゝつた鏡のやうな滑かな水の面、捺したやうに静かに映つて居る山の影をりく、軽い翼で其上を破つて行く水鳥の群、ことにかれの辿つて行く路の頭の上には、子規が鈴を鳴したやうに、牙えた高音を張つて啼いて居た。しかしかれはそれに慰められもしなかつた。心は矢張忘れなければならぬ女の傍に行つて居た。「しかし時が経つたら……ある時日を経過したなら、いつかこ

の重荷が一つ一つ卸されて行く事だらう！ 時！ 時より他に、今は自分の味方になつて呉れるものはない」ふと氣が附くと、かれはこんなことを考へて居た。

「それにしても、何うして居るだらう？ 何と思つて居るだらう。

あの手紙は何ういふ反應を女に起させたらう？」

すぐ續いてかう思つたかれは、手紙を見た時の女の顔と心持とを痛切に知り度いと思つた。しかしそれは決して知ることの出来ない願であつた。

かれは唯歩いて行つた。何處までも何處迄も同じやうな屈曲した路が續いた。霧は段々深くなつて来た。白い軽いのがいつか灰色の重々しいものと變つた。見て居る中に湖水の上

にもそれが這ふやうに早く早く靡いて行つた。少時すると林も草叢も全くそれに包まれて了つて、あたりはすべて灰色の天地となつた。かれは唯先へ先へと歩いて行つた。丁度その灰色の霧の中にその苦悶のかくれ家を求める人のやうに。

四

……久しく御目に懸りません。なんだか氣になつて氣になつて仕方がないんです。今日も餘り氣がクサクサ致します。ですので御座敷は皆なことわつて、ぐづぐづ致して居ります。それでも時々には自分で自分の氣がわからないことがあるほど、お酒を飲んで、はしやくとことがあるんですよ。おとつひの晩、それは酔つて了つて、箱屋の政どんにやつと車に乗せて貰つて歸つて来て、明日起きて見ると、二階にちやんと寝て居るぢや御座いませんか。政どんは、ゆふべは姐さんは大變酔つて居ましたねと笑つて居るんですもの、わたしはさまりがわ

るくなつてしまひました。
 何うしてあんな氣になるんでせう。わたしのおなかの中に
 は、屹度わるい虫か何か居るんぢやないかとふつと思ふこと
 などがあります。自分で自分の譯が分らなくなるんですも
 の。

近い中に屹度来て頂戴、いろいろ面白い話がありますから

十月五日

——より

——様

……此間は留守にして申譯がありません。實は御断りし
 て行かうと思つたんですけれど、急なものでしたから、その間
 がなかつたんです。〇〇に大變叱られて了ひました。何う

か悪く思はないで頂戴。實は可哀相なんですから。

二月七日

——より

——様

……あれから、町の通りをぶらぶら歩いて歸りました。好
 い月でしたのね。角の勸工場で買物をして、家に歸つて来る
 と、二階に月が一杯にさし込んで居て、好い心持でした。關屋
 さんが丁度其處へ御座敷から歸つて来て、それから二人でい
 るいろな話をして、泣いたり笑つたりして、遅くまで寝られま
 せんでした。關屋さんは可哀相な人だと思ひました。

八月十三日

——より

——様

……明日は屹度来て下さい。そんなことを仰しやたッて、それはうそなんですから。貴郎もそんなことを御しんようなさるとは思ひませんでした。辛い、悲しい。いつかも言つた通り、どうせわたくしは人並な死かたが出来ない星なんですから。お淘宮の先生もちやんとそれは言つて居るんですから。いゝえ男なんぞ何うせ頼りにはならないといふことはちやんと存じて居ります。貴郎だつて私の元のことはよく御存じの癖に……男らしくもない。

此間電車で木山さんに逢ひました。可愛い坊ちやんを連れとお出ででした。私が車掌の居る處からズツと入つて行く

と其處に木山さんがいらつしやるぢやありませんか。私ははつとしましたけれど、御挨拶をすると、『達者かね』ツと仰しやるんでせう。私は悲しくなつて了ひました。坊ちやんが怪我をして、それで東京に出ていらしつたんださうです。もう大變によくおんなすつたんですッて、それでも坊ちやんは綱帯をしていらつしやいました。可愛い坊ちやん私もあんな坊ちやんがほしい。

貴郎は私が木山さんのことを言つたッて怒りはしませんね。木山さんは私の初めの好きな好きな人ですもの。私がいかになつたのも、貴郎にも愛憎をつかさされるやうなわるい人間になつたのも、木山さんの爲ですもの。昔がこひしい。罪

がなかつた昔がこひしい。——本當に明日は来て下さいませね。

十月十日

様

より

數通の手紙の殻は、秋が来て逸早く萎み去つた枯葉のやうにそこらに散ばつて風に吹かれて居た。

庭では女中が庭を掃いて居た。緑葉を漉した明るい日の光は、籐椅子の人の衣の上に線をなして落ちた。

五

脚絆を着けて、齒を黒く涅めて、無造作に髪を束ねた女が、亭主らしい男と一緒に、睦しさに馬を引いて行くのに邂逅することなどもあつた。

『今日は』

其女は挨拶をしてすれ違つた。かれはその姿の林の中に見えなくなるまで見送つて立つて居た。その單純な無邪氣な生活が彼には羨しかつた。さういふ女を妻にして一生を送つて行く男と、疑惑と不安とに心も身も勞らして了つた自己とを引較べてかれは黯然とした。

湖に沿つた路はいろいろな人が通つて行つた。目も覚めるやうな紅い撫子を山駕籠の上に結びつけて行く娘もあれば、快活な草鞋がけで、採取網を肩にかけて、をりをり立留つて、蝶などを捉へて行く學生らしい少年もあつた。中には瓢箪などを下げて面白さうに笑つて話して行く老人達もあつた。睦しさうに手を組合せて歩いて行く西洋人の群は、殊にこの林の中に際立つて鮮かに見えた。

時には肥つた女の西洋人が、高い臺の上に幅をして乗つて通つて行くことなどもある。それを擔いだ四人の男の額からは、汗がダクダク流れた。

若い女中は、町のもので、宅では穀屋をして居て、夏場だけ、親類

の旅籠屋に頼まれて手傳ひに来て居た。「お時さんツて言ふんだね、君は？」ある時、かれはこんな調子で話しかけた。

給仕をする間も、何處となくオドオドしたやうな處が見えた。丸顔の、肌は白い、眼の綺麗な女であつた。何か言はれると、すぐ顔を赧くした。

「戀などをさうした社會の女に求めるのは、愚かなことだ。かれ等は自覺しないまでも、自覺に近い分析と判断とを持つて居る。経験が生んだ偏つた觀察を持つて居る。本當の戀の出来るやうな女は、無邪氣な田舎娘か、感情に餓ゑた若い女學生に限つて居る。」

何うした聯想か、かれは一年ほど前にある友人と灯の明るい

都會の通を歩きながら、かうした話をしたことを思ひ出した。其時、かれは「戀の出来ない女戀を玩弄物にするやうな女さういふ女が面白いんだ。其處に何うかすると洗練された心持が發見されることがある」こんなことを言つたのを覚えて居る。其時と今との心の推移の甚しいのをかれは考へた。

藤椅子の上からは、若い女中の姿が常に見えて居た。いかにも苦勞のなささうな無邪氣な顔をして、赤い襷を十文字に綾取つて、甲斐々々しく立働いて居るさまは、慇懃くとも今のかれの眼には一種の色彩と快感とを與へるに十分であつた。緑葉の薄暗い庭に際立つて明るく見えるおしろい草に對して、こいみ加減に草箒を持つてあたりを掃除してゐる色白の頬やら新しい

手拭の下から黒い房々した髪を見せて、バケツに汲んで來た綺麗な水に雑巾を浸して居る白い手やら、篋の水のちよるちよると落ちる傍で、無心に膳や椀を洗つて居るさまなどが、自分とは丸で關係のない繪の中の人物のやうに、かれには思はれた。

「午飯には、何か肴でない旨い野菜を煮るやうに言つて下さい」
笑ひながら、こんなことを言ふと、

「野菜——かしこまりました」
何處か嬌羞を帯びた女中の顔をかれはじつと見た。

「あの西洋の婦人はあれは何者です？」

ある日かれは若い女中にかう訊ねた。

『何で御座いますか……よく存じませんけれど……』

知つて居りながら言ふを憚るといふ様な風が其態度やら言葉やらに見えた。今日に限らずその西洋の婦人はよく別荘の前を往つたり來たりした。林の中でもこれまでに掛くとも三四度は邂逅した。

いつも小さい可愛い犬を伴つて居た。明髪の鼻の高い色の白い、小づくりな若い女で、眉と眼との間に言ふに言はれない美しい表情があつた。小さな靴に長い服の裾を蹴つて歩いて行くさまは、人を惱殺させずには置かないといふやうな嬌態を持つて居た。

いつも一人で歩いて居るといふことが第一にかれの好奇心を惹いた。湖水に向つて物思はしげに黙つて立つて居ることもあれば、口笛を鳴らして道草を食つてゐる犬を呼んで居ることもあつた。昨日逢つたのは夕暮であつた。薄暗い林の中にくつきりとその派手なつくりを際立せて、いつものやうに静かな品をして歩いて來た。摩れ違はうとする時、その美しい眼はじつと此方を見た。

そこは林の間から湖水の開けて見える處であつた。汀の石には漣がさゝやかな音を立て、居た。婦人は其處に立留つたまゝ、久しく暮れて行く湖水を見て居た。

ある日の散歩にかれは今までよりも遠い處へと思立つて行

つた。振り拂つても振り拂つても女の幻影はかれを離れなかつた。散歩でもしてそれをまぎらすより他に仕方がないやうな日が幾日か續いた。かれは何うかするとそれでも賑やかな町の方へと出かけて行つて、球などついで見ることもあるが、大抵は人の居ない静かな林の方へと足を向けた。

湖水を縁取つた路は長く長く續いた。それは何處まで行つたら盡きるかと思はれるやうな路であつた。藪と熊笹と、梅の木立とをりくく見える湖水と、それより他には何もなかつた。別荘らしい家屋も、もう此處等には見當らなかつた。

思ひもかけず湖水の一角が俄かにその前に開けた。と、其處に一軒漁師の家らしい簷の低い板葺の家屋がぼつねんとして

湖水に面して立つて居た。前には大きな網が日に向つて干してあつて、井戸の向うには汚い狭い勝手が覗いて見られた。渚には舟やらボットやらが繋がれてあつた。

湖に面した一間、其處にはハンモックが吊つてあつたり、藤椅子が置いてあつたり、卓が据ゑてあつたりした。卓の上には紅い白い花が大きな花瓶に生けてあつた。

例の夏場だけ西洋人に間貸をしたものと見える。かう思つたかれは、ふと傍に見馴れた可愛いその小犬の蹲つて居るのを発見して、鬱なからず驚かされた。犬の主人は、其處に奥の藤椅子に身を横へて小説らしい本を熱心に讀んで居た。

『は、ア、こんな處に居るのか』

く關係をつけた様な話でした。……」

「フム、さうかねえ」

「何でも拂いだ金も餘程の高だつて言ふ評判でした。えらい女があるもんですな。こんな山の中にまで来て、そんなことを爲ないたつてよささうなものですにな。」

「でも商賣なら仕方がない」

かれは笑ひながらかう言つたが、「矢張西洋人ばかりを相手にして居るのかね？ ……つまり相手を拵へて、此方から先の泊つて居る所へ出張するつて言ふ譯だね？」

「まあ、さうですな、其處等の別荘なども泊つて歩くやうでした」
外國のさびしい山の中に来て、湖水に面した一間に、さうした

夏を送つて行く女が一層鮮やかに印象されて来るやうな氣がした。女の服の裾にまつはる可愛い小さい犬は、更に一層その周圍を繪のやうにして見せるやうな氣もした。

その女が遣つて来るのには今年はまだ少し節が早かつたなどといふことを番頭はやがて話して聞かせた。湖畔にある別荘がすつかりふさがる頃には、それは随分賑かなもので、月の明るい夜など、其處にも此處にも二人づれの群が手を組合せて、蜜のやうな會話を取交すさうである。

「さうですな、八月の中頃でせう。年に因つて、尤で西洋人が來ないこともありますが、雨さへ長續きがしなければ、大抵遣つてまゐります。その頃は町からも、宇都宮からも、東京からも女が

随分上つて來ますから……それは賑やかなものです。」

「そして一體名は何と言ふんだえ……知らないかねえ？」

不意にかれは思ひ附いたやうにかう番頭に訊ねた。

「あの女の名ですか……さう確かヘンリッタと言つたと思つて居ます」

「ヘンリッタさん、好い名だな」

かれはかう言つて笑つた。番頭もにやにや笑つた。番頭は聞きもしないのに、猶ほ種々のことを話した。中禪寺に近い別荘は、誰も女の素生を知つて居て借さないもので、止むを得ず、あんな處の漁師の家の間を借りたのだなどとも言つた。

それと知らない前と後とでは、同じロマンチックな感じでも、著しく違つて居るのをかれは思つた。かれはさうした女性がこのさびしい湖畔に、自分と同じやうにして居るといふことを考へてひとり微笑した。

さういふ女を卑んだり罵つたりする時代をかれはもうすつと以前に通つて居た。さういふ種類の女には、かれはいつも一種の好奇心を以て相對するのを常として居た。

その女は派手な紅いパツルをさして居ることもあつた。水色の服を長く引摺るやうにして歩いて行くこともあつた。帽子に挿した紅い薔薇はいつも遠くから見えた。

「また、ヘンリッタさんが通つて行つた。」

此頃では大分馴れて言葉をかけられても顔を赧くするやうなこともなくなつた女中は、ある時縁側の隅に立つて、こんなことを言つて其方を見送つて居た。

『一體何處に行くんだね』

かれがかう訊くと、

『ホテルでせう』

『ホテルに誰かあの女の世話をする人でも居るのかね』

『手代さん見たやうな人に頼みに行くんでせう』

女中はこんなことを言つて笑つた。

『旦那さんを見つけて置いてから出かけてくれば好いのにな……』

戯談らしく言ふと

『だつて、さうは行きません』

『何故！』

『何故つて、さうは出来ないんでせう』

女中はかう言つて笑つた。

かれは日を経るに従つて、いくらか其心が軽くなつて行くのを覺えた。勿論、それが以前よりも烈しい力で全身を壓すやうに迫つて来ることはないでもない。時には自分から何うすることも出来ないのに呆れて、ぼんやりと一日を暮して了ふことなどもあつた。しかし此頃では、書籍を読んだり新聞を見たりする餘裕が少しは出来て來た。

東京のことも知り度い友達の消息も聞き度い——其女の近況が殊に知り度かつた。かれは段々東京から来る郵便を待つやうになつた。

このかくれ家に、郵便脚夫が初めて郵便を配達して来たのは、二三日前の午頃であつた。その前にもかれは配達の間を女中に聞いた。

『一體此處では一日に幾度配達するのかね』

『三度でせう屹度。朝と午と晩と』

其時女中はかう答へた

女から手紙の来やう筈がなかつた。それに此處の宿所も知らせてなかつた。それでもかれは一束にして配達して来た手

紙の中にそれを期待して居た。もしや交つて居やしないかと思つて逸早くそれを引くりかへして見た。雑誌が一冊新聞二枚手紙が三通それが別に読みたいと思ふやうなものでなかつたのを発見した時には、かれは勘からず失望した。

それからかれは新聞を三種程取つて女の顔の挿入されてゐる六號活字のところを熱心に讀んだ。其處にはさういふ社會の女の消息が短かく面白く書いてあつた。其處からでもかれは女の消息を知り度いと思つた。

六

「貴郎は私を信用して下さらない？」

其時女は笑を含んで、かれの方を見た。その眼は今でもはつきりと思ひ出された。

「お前の心の全部を寄越せと言ふのではない。一部で好い——唯ほんの一部で好い。お前の心の何處かに僕が居さへすれば好いんだ。それだけは解つたね？」

「私は皆な上げるわ。此頃では一日だつて、貴郎のことを思はないことはないやうになつたんですもの」

男の言つた言葉も、女の言つた言葉も、両方とも半分は虚偽で

あつたといふことを考へて、かれは今読みかけて居た水淺黄の表紙の洋書を下に置いた。

虚偽？ 虚偽と言ふ譯でもない。虚偽と断定して了ふ譯には行かない。かうすぐかれは考へ直した。勘くとも其時かれの言つた言葉は、かれに取つては眞面目なものであつた。眞情を吐露したものであつた。しかし其の要求した一部は、一部ではなく全部であるといふことが段々解つて來た。髪も眼も心もすべて自分のものになければ満足されないものであつた。ある時はこんなことも言つた。

「もうお互に随分長く一緒になつて居た。もう別れても好い時分だ。……どうだ、淨く別れやうぢやないか」

「え、別れませう。貴郎がお厭なら、いつでも別れてあげてよ」
 二人は眞面目な顔付をして居た。さてさう言つて置いて、二人は少時黙つて顔を見合はして居た。女は口にした敷島の吸口をさも口惜しさに嚙んで居たが、「別れられるなら、別れて御覽なさい。本當に貴郎は人の心も知らないで……」かう言つて、その吸殻を靜かに灰吹の中に落した。ジョーと音がした。其時、その音と同じやうな佗しさを覺えたことをかれは今でも記憶して居た。

何うせ一度は別れなければならぬ。それが何時何んな形式を以て現はれて来るだらう？ かれはこれまでもさうしたことを幾度も思つて見た。時にはそれを想像して、其處に

マンナツクな感じを味つて見ることもなともあつた。年月を経
 てからの再會、そんなことまでも想像した。

かれは再び洋書を手に取つて読み續けた。かれは昨日これを読み始めてから、少からず心を引寄せられたといふ風で、散歩にも出かけずに、熱心に読み耽つて居た。すぐれた作家の筆に成つた心の閱歷には、底まで人を引かなければやまないやうな魅力があつた。其處には紅い血汐の滴たるやうな心もあれば、暗い佗しい如何ともすることの出来ないやうな苦悶もあつた。作中に出て来る男と女との活劇は、矢張かれと其女との活劇であつた。かれは時々その書を下に置いて、重い苦しい長大息を吐いた。顔を上に、眼を大きく明いて、じつと物を考へて居るや

うな恰好をして、さてまた熱心に読み始めた。鍵を女の手に握られて、出ることも入ることも出来ないやうになつた男の心が殊に深くかれの同情を惹いた。かれは女性に對する男性の復讐などといふことを考へ乍ら、また長大息を吐いた。

洋書の背皮には、Notre Coeur. by Guy De Maupassant としてあつた。

その小説をかれは一日懸つて讀んだ。

それはかれの苦痛を眼の前に描いて見せたやうなものであつた。思ひ當る所がある度毎に、かれは頭を左右に振つた。かれは最後の頁を翻すまで、それを手から離すことが出来なかつた。

た。

讀終つて、かれはホツとして、その書を傍に置いた。

頭は熱して居た。胸は押しつけられるやうな感じがした。最後の解決が不満足であり乍ら、而も佗しい心細い感情をかれの心の底に渦のやうに捲き起させた。

知るといふことゝ、判断を促されたといふことゝは、覺めるといふことに就いて、多くの影響を持つて居なかつた。不思議にも女の幻影が第一に鮮かに浮んで通つた。

癒え懸けた創傷に更に鋭利な刃を當てられたやうな氣もした。

「一度肉の關係をつけたものは、何うしたつて離れられるもの

ではない』かう言つて、その作者は、皮肉な笑を洩して居るやうにも思はれた。更に一步を進めて、『さまを見る！好い氣味だ！』かうも言つて居るやうにも思はれた。

此處に来てから、もう一週間も過ぎ去つた。其間かれは僧侶のやうな生活を送つて居た。夜半に眼を覺すと、洋燈が暗く其の傍に點いて居て、徒らに湖水の波の音がさびしく聞えて來るばかりであつた。傍には誰も居なかつた。

それは夜ばかりではなかつた。晝間でもさういふ状態の氣分に置かれて居る時が度々あつた。髪やら眉やらが常にかれの眼の前にあつた。

さういふ時には、かうして此山の中に遣つて來たといふ意味

が、かれ自身にも解らなくなつて居た。『いつそ歸つて了はるか』かう自分で口へ出して言つて見ることもあつた。

一週間逢はずに居ると、嫉妬も不安も男の意氣地も何も彼も忘れて了つて、唯その髪と眉とに向つて、屹度引づられて行つた心、それがまた今烈しい力で繰返されて來た。アスベルトの敷き詰めた兩側の路、其處を駒下駄を引摺り乍ら歩いて居て、ふと俄かに逢ひたくなつて出懸けて行つた時の町の灯や、何處かに行つて居ないところに電話をかけて、失望して、三日も懊惱して暮して居た頃のわびしい夜の雨や、思ひもかけず路の四角で邂逅して、それから一緒に伴れ立つて歩いた楽しい夕暮の徜徉や、さうしたあらゆるものが新しい幻影となつて、かれの前を生き

て通つた。

かれはかの女を自由にした。解放した。かの女は何處に行つてももう好い身になつてゐる。誰を情人にしても差支へない身になつてゐる。一日と言はず、半日と言はず、一時間と言はず、誰かの持物となつて、もう再びと指をさすことも出来なくなつて居るかも知れなかつた。それからまた女の身として、あの手紙を見て、かれのことはもう駄目だと失望して、あきらめて、他の人に身を寄せるやうになつたかも知れなかつた。それを思ふと、居ても立つても居られないやうな焦燥をかれは感じた。

此方の心持の離れて行く度数は、向うの心持の離れて行く度数である。かういふ考へが此時突如として、頭を衝いて来た。女とかれとの間には、人知れない不可思議な大きな力が開いたり閉ぢたり離れたり即いたりして居た。

動搖、疲勞、不定——さうしたものから遁れやうとして来たかれは、いつの間にか再びその巴渦の中に心を投じて居た。離れない爲には、何んな犠牲を敢てしても差支ないといふ心になつて居た。

手紙を書かうと思つて、かれは籐椅子の上から下りた。机は室の一隅に置いてあつた。其處からは硝子障子を隔て、湖水の一角と、深い碧の上に半孕んだ白い帆と、徐に其影を水に涵し

て居る山と雲とが見えた。此頃でも稀に見るといふ静かな夕暮であつた。滅多に筆など執つたことがないので、硯は全く乾いてカラカラになつて居た。水入れにも水が一滴も入つて居なかつた。かれは手紙を書かうとする思立の前兆が凶であつたかのやうに、其儘水入を下に置いて、兩手を頬に當て、久しい間深い思に沈んだ。漲つて来る力を辛うじて押へやうとする人のやうにも見えた。

暫くしてかれは身を起した。手には水入れを持つて居た。篋から綺麗な水のちよろちよると落ちるところには、先程女中が裏の山から取つて来た大きな山百合が無造作にさしてあつた。ポチャンと音して水の底に沈んだ水入からは、小さい泡が

プク／＼と湧やうにあがつて、やがてそれがばつたりと止つた。瀬戸の藍の濃い色がくつきりと水の中に見えて居た。

机の前に戻つて来たかれは、兎に角水入から水を硯に落して、そして静かに墨を磨り始めた。

墨が濃くなつても、かれは磨る手を留めなかつた。引張つて行く力と押へて居る力とは、其處でも争鬭を續けて居た。しかし矢張引張る力には敵はないと言つたやうに、かれは靴の中から巻紙と封筒を出して、そして筆を手を取つた。

書きかけては、幾度となく丸めて捨てた。今の氣分にはまつたやうな文句が何うしても出て來なかつた。前に書いてやつた手紙が思ひ切つて絶望的であつたので、それと今の氣分との

間に大きな間隔が出来て居るのをかれは發見した。

一度筆を捨てたかれは暫くの間仰向けに倒れて兩手を後腦のところ組合せて、じつと天井を見て居た。朝雲暮雨と書いた横額の長押にかゝつて居るのに今始めて氣が附いたやうにかれは無心にそれに見入つた。

ふと氣が附くと、自分といふものゝ意氣地なさといふことよりも、男の意氣地なさといふことが考へられて居た。女の勝利それが腹立しかつた。

それでもかれは筆を執つた。

始めに出来た手紙は、いかにも調子が弱かつた。「何うしても別れられなう」こんな文句も書いてあつた。「此間遣つた手紙はあれは破つて棄て、呉れ……。今ではもうあんな心持ではないから」かうした言葉も書いてあつた。湖畔の別荘の涼しいことだの、若い女中と二人で世を離れて日を送つて居ることだの、山百合の澤山咲いて居る事だの、其他種々な事を書いた。最後に、「この手紙を見たら、來て呉れ……。屹度來て呉れるね」と書いた。

名宛を書き終つて、さて讀返して見た。「こんな手紙が出せるか」かれはいさなり自分でかう言つて、さも腹立しさうにそれを破つて捨てた。

次に書いたのは、今少し軽い洒脱な調子を持つて居た。苦悶を出来るだけ包みかくして、静かに一人此處に避暑に来て居るやうな風に書いた。「何うです、お暇なら出かけて来て呉れませんか。……此間の仲直りもしたいから」かうした風な文句が其處にも此處にもあつた。昨年の春時分心がまだから突詰めて居ない頃には、よくかういふ風な手紙の遣り取をして、洒落を言つたり、からかつたり、わざと皮肉なことを書いて女を怒らせて見たりした。其頃のことになつた。今一度其時分の心持になりたいと思つた。

男が幾人あうが、何ういふ生活をして居やうが、そんなことは、其頃にはまだ眼中に置いてなかつた。其頃では女がみだれ

た姿をして室から出て来やうが、氣障な男と伴立つて一緒に歩いて居やうが、或はもつとひとひ處を見せつけられやうが、別にわるい氣分を感じるやうなこともなかつた。かれは書いた手紙を読み返しながら、其時の記憶を頭に繰返した。「まアこんな手紙でも遣つて見るか」かう口に出して言つて、封筒に入れて、番地と宛名とを書いて、それを机の傍に置いた。で、やゝ暫く頬杖をして、湖水の方を見て居た。しかしいつの間にかその心が變つて居るのをかれは發見した。そんな軽い心持では居られなかつた。

暫し心を落附けやうと思つて、かれは縁側から下駄を突懸けて庭に出た。かれの姿は、少時庭やら裏の林の中やらに見

えて居た。

三十分の後には、夫でもかれは矢張机の前に来て坐つて居た。今度は茶代のかへしに宿屋から貰つた中禪寺湖の繪葉書を取り出して、そこから一番よく湖水の氣分の出で居るのを一枚選び出した。

……此頃は何うして暮して居ますか、それが知りたい。忘れやうとしても忘れることが出来ない……

唯かう書いたさりで筆を捨てた。此方の宿所は表面に詳しく書いた。

兎に角女の消息を聞かないでは、氣がすまなかつた。苦悶を免がれるにも女の力を借りなければならなかつた。水で消さ

れるか、火で燃やされるか、何方にかしなればならなかつた。燻つて居るつらさをかれは此處に来てつくづく知つた。

夕暮の散歩には、かれは町の方へと出かけて行つた。懐中にはその繪葉書が入られてあつた。

まだかれはそれを出すやうな氣分になれなかつた。餘りに動搖し易い自己の腑甲斐なさが絶えず頭を苦しませた。一度ならず二度までも破つて捨て、了はうかとも思つて懐中から出して見た。

宿屋の別室には球臺が備へ付けてあつた。其處には客が三

四人頻りに球をついて居た。赤い白い球が、青い臺の上を滑かに轉がつて通つた。へこ帯に金鎖を絡ませた紳士らしい八字髻の男は、瘦せた背の低い男と笑ひながら頻りに何か批評してゐた。

かれは番頭の居る傍に腰をかけて、袂から敷島を一本出して、マツナをすつて火をつけて、スパスパとそれを吸つた。烟は緩かに軽く室の中に漂つて行つた。

一勝負済むのを待つて、かれは瘦せた男を相手にして始めて見た。何うした加減か、今日は球が思つたやうに動かなかつた。いつもならば、容易く走つて轉つて行く球も、思ひもかけない方向に向つて滑つて行つた。かれは一勝負をすまして、不機嫌な顔

をして其處を出た。

日増に暑くなつて行く此頃では、客ももうかなり多く集つて来て居た。庇髪に結つた若い女學生風の女だの、子供を連れた丸鬚の細君だの、新婚の夫婦らしい二人づれだのが、旅籠屋を出て、すいし湖畔へとぞろ／＼歩いて行つた。繪葉書を賣る店、FINE ARTS と書いたペンキ塗の大きな看板を掲げた店、それからステッキを並べた店、羊羹を並べた店などが、兩側に續いた。片側町になつたあたりからは、薄暮の湖水が繪のやうに展げられて見えた。

岸に打寄せる漣の音は、何となくかれの頭に舊恨と哀愁とを齎らすやうなやさしい調子を立て、居た。湖水の落口に架つ

てゐる橋の向うには、レール(キ)サイドホテルの白い洋館が、樹の間からナラナラと見えて、橋の袂にはポウトがタテ／＼と波に揺られて居た。町の出口から橋までの間の平坦な路——その路をかれは行つたり來たりした。

険しい山路に勞れたといふやうな遊覽者は、幾組となく向うから遣つて來た。「やつとついた！」などと言つてくたびれた足を引摺つて行くものもあつた。旅籠屋の前では、番頭や女中が店頭に出て喧しい聲を立て、客を呼んで居た。

薄暮のやわらかな空氣は、かれの心を次第にやさしい甘い悲哀の中につれて行つた。かれは久しく味つたことのない情味の染々と胸に溢れて來るのを覺えた。

ポストは町の中頃の大きな旅籠屋の前にあつた。かれが其處に來た時には、日はもうとつぷり暮れて、電燈が店と店についた。厨とを明るく照して居た。忙しさに働いて居る板番の男の顔は、物を煮る大鍋の湯氣の白い中にくつきりと見えた。其處に、ガヤガヤと一組の客が著いて、山駕籠が三挺まで並んで下された。「入つしやう、おつかれさま」と迎へに出る番頭や女中の聲を聞きながら、かれは繪葉書をポストの中にそつと落した。

かれは女から來る返事を期待しつゝ日を送つた。返事位は呉れるだらう。かう思ふ度毎に、かれは繪葉書に書いた文句の餘りに素氣なかつたのを惜んだり、引く力の薄かつたのを悔いたりした。男性の矜持に捉へられて思ふ心を傳へることの出來なかつたのをも後悔した。

あの葉書では、無論女の心を動かすことは出來ないに相違なかつた。女はその葉書を鳥渡手に取つて見て、すぐそれを傍に置いて、其儘忘れて了つたかも知れなかつた。強く出るにしても弱く出るにしても、今少し色の濃い言葉を、用ゆればよかつた。

七

こんなことを思ふほどかれの心は女の方に偏つて居た。

それから二三日は雨が降り續いた。灰色の雲が淡く湖水を鎮して、周圍の山も見えないやうな日が多かつた。梅の大きな幹からは、風につれた雨滴がをり／＼屋根の上にバラバラと音を立てた。かれは散歩にも出られずに終日臥たり起きたりして居た。籐椅子の上に身を横へて、晝寢をしてゐる顔は青白かつた。

雲が古綿の様になりぎれて飛ぶ日は殊に侘しかつた。山巔から湖上に渡る風は凄じい音をして、岸の樹立やら草叢を鳴らした。それに山の上は氣候が驚かるゝ程違つてゐた。裕を著たいた位に肌が冷々した。

返事は待つても待つても来なかつた。いつも合羽を着た郵便脚夫が降頻る雨を衝いてぬれた熊笹の中をガサガサと音を立て、入つて来た。その度毎にかれは胸を躍らした。しかし多くの手紙の中にも、かれはそれを見出すことが出来なかつた。天氣に似た佻しい氣分を抱きながら、かれは一日一日と暮した。湖畔の一間に往んで居るヘンリツタの姿も此頃では滅多に見る様なこともなかつた。蛇の目傘をさして、三度々々食事を運んで来る女中の姿が、唯灰色な單調を破る計りであつた。雨は猶ほ降續いた。

ある日の午後、かれは例のごとく籐椅子に横つて、向うの山に懸つては晴れかゝつては晴れする雲を見て居た。湖水は鐵色をなして前に展げられて居た。雨がまた一しきりザアと降つて来た。かれは湖水の上に細かい斑紋をつくつて繁く落ちて来る雨をじつと見て居たが、ふとある物の音を耳にして、それとなく眼を其方に移した。

見覚えある女中の紺蛇の目の傘についで、深く幌をかけた車が一臺、饅頭笠をかぶつた車夫に曳かれながら、泥濘の深い雨の路を此方へ此方へと遣つて来るのが見えた。聞えたのはその車の轍の石にきしる音であつた。かれの胸は俄かに躍つた。もしやと思つたが、此雨にそんなことがありやう筈がないと思

つて、すぐそれを打消して了つた。蛇目傘と車とは、絡れるやうにして、次第に此方へと近づいて来たが、やがて門の前に来たと思ふと、車夫は梶棒を下して、猫背になつた後姿を此方に見せて、前の雨被ひを外づしにかゝつた。勝色の蝙蝠傘と白い手とが見えて、續いて大きな丸鬘が見えた。はッと思ふ暇もなかつた。其處にくつきりと現はれた女の姿は、女中のさし翳す傘にさへられるやうにして、露の深い熊笹の間の路を此方へと来た。

八

「まア大變な處に居るのね」かう言つて女は縁側の踏石から座敷に上つた。

餘りの不意に驚いたといふやうに、男は唯そはそはとして居た。急には言葉も出なかつた。

暫くしてから、

「一體何うして来たんだ」

「何うして来たは随分な御挨拶ね」女はわざやかな笑を顔に見せて、「これでも一生懸命で来たんですよ。橋が落ちてたり何かして、それは随分大變でしたよ」

「今朝發つて来たのか？」

「え……今朝上野から」また笑つて見せて、「この雨ぢやとても行かれないなんて、皆ながおどかさずんですもの。でも、何時この雨が歌むか解りませんからね……。中禪寺に来てまアうれしいと思つて安心すると、まだ先だつて言ふんでせう。私何うしやうかと思つた？」

男の方を見て、

「よくこんな處に居るのね」

それは男の心をすつかり讀んで了ふといふやうな眼付であつた。私に逢つてうれしいでせう、かうして私を見て居たら、満足でせう。かうその眼やら顔やらが言つて居るやうにも思は

れた。

「橋の落ちた處は、それや大變でしたよ。見て居ると、石がドンドン流れるんですもの。妾怖くなつて車の上で、戦へながらこいで通つて来たのよ。」

女はこんなことを餘念なく話してきかせた。で、羽織を脱いで、女中の持つて来た衣紋竹にそれをかけて、再び柱の處に来て、體を斜に品をして坐つた。敏捷で、そして一刻もじつとしてゐないその眼は、火鉢の傍で茶を煎れる支度をして居る女中の方を見たり、其處に坐つて居る男の方を見たりした。暫く黙つて互に顔を見合せて居たが。

「何うして？」

やがて女はかう男に言つた。

「お前こそ何うした？」

「私？」可笑しさを包みかくしたやうな笑ひ方をして、「まあ好くつてよ、後で話すわ」かう言ふ眼付をして、また男の眼をじつと見た。

女中は茶を運んで来て、それを女の前に出した。男は、「羊羹がまだあつたらう？」かう女中に言つた。と、女は急に思付いたやうに、信玄袋の中から袋に入れた菓子を出して、「彼處で買つて来たのよ」かう言つて、新橋の壺屋の唐饅頭を出した。

「これは旨いな」

かう言つて、男はそれを一つ取つて、今度は女中に、「お時さん

何うです、旨いお土産がありますよ」

女中は顔を赧くして、鳥渡お時儀をした。女は半紙を帯の間から出して、唐饅頭を五つほど包んで、それを女中の方に遣つた。女中はまた時儀をした。

女中は火鉢の傍に坐りながら、知れないやうにして、絶えず二人の方を見て居た。男は女中の眼の中に一種の笑が含まれてゐるのを認めた。

紺蛇の目の傘をさしてやがて歸つて行つた女中の後姿を見送つて居た女は、「おとなしきやうな女中ね」かう言つて意味ありさうに男の方を見た。

「貴郎も随分ね」

「何故？」

「何故もないわ。人の氣を知らないのも程があつてよ」

「でも仕方がないさ」

「何故仕方がないの」かう言つて正面から男の方を見た女の顔には、稍々真面目らしい表情があつた。すぐに言葉をついで、「貴郎は私達の間はあんな一本の手紙で別れられるやうなものだと思つて？」

「でも、僕は苦しくつて仕方がなかつた。とても僕の方では、世話が出來ないと思つたから、それであの手紙を遣つたんだ」

「あの手紙を私は破いて捨て了つてよ」二人はまた黙つた。

暫くしてから、女は、

「で、こんなところに居て、さびしくはないの？」

「それはさびしかつた」

「私のことなど思ひも出さない？すつかり忘れて了つた？」

かれは笑ひながら、

「忘れて了つたよ」

「さう？忘れて了つて？ぢア、何故あんなはがきなど下すつたの？」

かれは投げるやうに、

「まア、好いさ、そんなことは何うでも……」

「好くないのよ。私の心持が解らなくつては、私だつてつまら

ないぢやありませんか。それヤ商賣をしてるんですから、怒られるやうなことはそれヤ澤山あるでせうけれど』

『まア好いよ』

『随分心配してよ私。あの手紙では、本當に吃驚してよ。貴郎は屹度何處かに行つて了つたに違ひないし行つた處は解らないし、申解をしたいにも仕やうがないし……それは、随分氣を揉んでよ。だからはがきを頂戴した時には、それは本當に嬉しかつたわ。……まだ私を忘れては下さらなかつたんですね』

かう言つて笑つて、

『それでも逢はれて本當にうれしかつた。貴郎がもし居なかつたら、何うしやうかと思つて、心配しいしい來たのよ』

『それで家の方は、何ういふ風にして來たんだ？』

『家の方？家の方は心配はないんですの、檢番にはちやんと用事をつけて來ましたから……。本當に、貴郎、手紙のやうなことを考へて居るの？』

かれは女の方を見て、『だつて考へない譯に行かないぢやないか。僕だつて男の一分が立たないやうなハメには陥りたくないからねえ』

『そんな風に考へて居るの？』ちつと男の顔を見て、『だつて、あれほど私の心を言つたぢやありませんか。それぢや貴郎には私の心はまだ解つて居ないのねえ』

『さう言へばさうかも知れない。殊に女の身ではさうかも知

れない。けれど口で言つたことより、眼で見つたことの方が確かだからねえ。……僕はまた今頃は箱根にでも行つて居たかと思つて居た。……まア然し、よく来て呉れた』

『またあんなことを。そんな厭味を言ふやうな貴郎ぢやなかつたのに……。此頃は、貴郎も大變質が悪くなつてね』

『さうかな』

かれはかう言つて笑つた。

離れて苦しんで居た心がびつたり合つたやうに二人は眼を見合せた。

これまでも逢ふとすぐ心が解けて行つた。

明るい笑顔の前には、疑惑も不安も動搖も何もなかつた。折

角思ひ立つた決心もまたこれで水の泡に歸して了つた。こん

なことを思ひながら、かれは女の方を見て居た。

しかし一通の端書に引寄せられて、遙々雨を衝いて、この山の

中で女が遣つて来たといふことは、かれをして男性の矜恃を

保たしむるに十分であつた。

『それでも本當によく来て呉れた』

かれは今一度から繰返して言つた。

『よく来て呉れた處ではないのよ。お禮など言つて貰はうと思つて来たんぢやなくつてよ。貴郎にあんな風に思はれては、

私は立つ瀬がないから、何も彼も捨て、置いて出て来たのよ。
来る間も、それや気が気ぢやなかつたわ。……わかつてね、わか
つて下すつてね』

女はかう言つて、男の心を引つけなければ止まないやうな眼
付をした。

女は嬉しさうにして居た。少時してから、室の中を其處此處
と歩いたり、火鉢の前に坐つて見たり、勝手元の方に行つて窺い
て見たりした。縁側の處へ行つては、『湖水が見えるわね、好い
景色ね』かう言つて、すらりとした後姿を此方に見せて、暫しの
間じつと立つて見て居た。

『さびしいにはさびしいけど、静かで好いわねえ』

こんなことも言つて笑つた。

今までの淋しい、佗しい林の中の生活は、俄かに派手な色彩で
彩られた。女は艶のある聲で、東京の話は何彼と話して聞かせ
た。汽車の中で女の一人旅を人々に怪まれた話などもした。

『何うせ素人には見えないでせう。なもんだから、皆なじろく
見るんでせう。何うしても田舎ですわねえ……それから町で
お中食をつかつて居ても、番頭さへ何方さまへなんて、怪訝な顔
をして聞くぢやありませんか。女の一人旅はいやなものです
わねえ』

かれは次第に女の生々した話やら気分やらに引込まれて行
くやうに見えた。微笑を顔に湛えて、快活に話して居るさまは、

今まで蒼い顔をして、ブラブラと其處此處を散歩して居た人は思へなかつた。時には女の話につれて聲高く笑つたりなどした。

「一人では、もしものことがあつてはッて家でも言つたんですけれど……去年と違つて體が自由になつて居るもんですから、さうやかましくも言ませんよ」

何かの話の次に、女がかう言ふと、

「ぢや、當分此處に居ても好いんだね」

「それは好いわ。そのつもりで來たんですもの」

「でも、さびしいだらう？」

「そんなことはないわ。靜かで好いわ。本當に人氣離れてお

く山住びだわね」

かう言つて快活な調子で、「とうとう來たわね、日光に？」

女は籐椅子に腰をかけたりなどして居た。根上りに結つた丸鬘には、翡翠の根掛がよく似合つて見えた。細い華奢な指には小さなダイヤの指環が光つて居た。

「これ、此間貰つたのよ」

こんなことを言つて、それを呉れた客のことを笑つて話して聞かせた。

此處に來てからの生活のさびしかつたことなどを男が話す

と、女は片頬を笑ませながら面白さうにして聞いて居た。ヘンリツタの話は殊に深い興味を惹いたらしく見えた。「さうですかねえ。こんな處まで来て、そんな真似をしないたッてよさうなものですにねえ」

かう言つて考へて、

「まだ此處よりも奥なんですか、其家は？西洋の人は矢張えらいわねえ。この雨に、そんな山の中に、一人で居るなんて私などにはとても出来ないわ」

やがて女中の話が出ると、

「好い容色ね」

かう女は言つた。

「容色はよくないけれど、鳥渡可愛い顔をして居るだらう？それに罪がなくつて好い。本當の戀なんて言ふものは、あゝいふ娘でなくつては出来ないんだ。」

「初めつから貴郎の世話をしてゐて？」

かれは笑つて點頭いて見せた。

「貴郎に惚れて居るのよ、屹度」平氣な顔でこんなことを言つて、「だつて、すぐ親い顔をするんですもの……私が来て、お氣の毒見たやうね……」女は笑つて居た。

いつも男の經驗するそゝられるやうな氣分が續いた。嬉しいやうな佻しいやうな楽しいやうな心持が男の體を動搖させた。女が持つて居る力に引摺られて行く佻しさが強く意識に

上つて来た。

『でも、本當は私のことなんか何うでも好いでせう。淋しかつたなんて、實は嘘よ。氣まぐれに端書を呉れたのよ。……』

『そんなことはないよ』

女はそれには構はず、『屹度嘘よ。……さうよ。それなのに、私遣つて来たのよ。私も随分馬鹿だわねえ。でなけりや、此處に来るのに、私と一緒に伴れて下さらない譯はないんですもの。別れるの何んのツて、あんな水臭い手紙をよこしたのは、さういふ心持なのよ』

『そんなことはないよ、何故そんなことを言ふんだえ？』

『だって貴郎も餘り好い氣だわ。可愛い顔をしてるの、本當の

戀はあゝいふ娘でなくつちや出来ないのなんのツて……。私の心だつて少しは考て見て下さいよ』

『なんだ？そんなことを言つてゐるのか』

『だって何だか解かりやしないわ。先程だつて、あの女中は、厭に人の顔をじろじろ見て笑つて居るんですもの』

『馬鹿なことを言つてるね、お前は？』

『何うせ馬鹿よ』かう言つて、『本當につまらない！怖い厭な思をして、こんな處まで遣つて来て……。お邪魔なら、來なけりや好かつた。』

こんなことを言ふかと思ふと、女はすぐ笑つて話をして居た。急須に湯をさして持つて来て、『もう奥さんが來たから、浮氣は

駄目よ』など、言つた。

九

夕方から烈しい風雨になつた。
 樹の鳴り草のざわつく音に雑つて、ゴーと吼ゆる風の音は、山
 から山へ凄じく傳つて行つた。雨は瀧津瀬のやうに白く光つ
 て軒から落ちた。
 左程大きくなかつた雷も段々その響を加へて來た。電光は
 梭のやうに行き違つて、確を廻すやうな音が絶えず湖水に響き
 渡つた。『雷さまは私好きよ』などと言つて、縁側の柱の處に立
 つて面白さうに降り頻る雨を見て居た女も、後には、『随分ひと
 いのね』かう言ひながら座敷の方に入つて來た。

『さう？雷さまが此處の名物？いやな名物ねえ』

こんなことも言つた。

『貴郎、何んだか氣味がわるくなつて来てよ。戸を閉めませうよ』暫してから、女はかう言つて立上つて、一生懸命に前の雨戸をひきはじめた。もう日は暮れかゝつて居た。

片時も止まずに雨は降頻つた。

雨戸はそれでもところどころ細目に明けて置いた。そこからは、洋燈の光が濡れた草の葉やら、おしろい草やら、棒のやうに張り落ちる雨の脚やらに、チラチラと揺いで映つて光つた。

雷は段々強くなつて行つた。耳を掩ふやうな凄じい音がすぐ頭の上でした。『大丈夫だよ。此處の雷は、音はひどくつて』

滅多に落ちるやうなことはないんだから』かれはかう女に言つて聞かせた。

『でもひどいわねえ』

女は真面目な顔をしてじつとして坐つて居た。電光と雷聲とは絶る間もなく絡れ合つて、墨の様な闇の中に、濡れた草藪と灌木の林と湖水とを青白く見せた。また光つたと思ふと、凄じい音が般々として長く長く轟き渡つた。

雷の鳴つて居たのは、それでもさう長い間でもなかつた。一時間ばかりして、段々其音は遠く遠くなつて行つた。雨も小降りになつて来た。『もうあがつた。雨戸を明けやう』かう言つてかれは立つて行つた。

「雷が鳴つたから、これで雨がすつかり上るかも知れない」ついでにこんなことを言つたかれは、下駄を突かけて、戸外に出て見た。

雨は降つたり止んだりして居た。時々強く降つて来ては、またばつたりと晴れて行つた。山際に段々遠くなつて行つた雷の音に耳を傾けながら、女は漸く心が落附いたといふ風で、「随分怖かつたわねえ……山の中でこんな雨に逢つたら、それこそ大變ね……早く来てよかつた！」

二人は猶暫く縁側の處に坐つて何か話して居た。ランプの灯のかけに動く女の丸髻と白い顔とは、暗い闇の中にはつきりと見えた。楽しさうに笑ふ聲もした。

林の中の別荘の雨戸が再び閉められる頃には、雨はまた音を立て、降つて来た。

十

朝はあざやかに晴れて居た。湖は鏡のやうに滑かに碧を湛えて、水禽の掠めて行つた後は、一痕長く水の上に白い線を引いて見られた。山はくつきりとその輪廓を青い空に見せてゐた。樹の梢からは、残つた雨滴がをりく／＼と熊笹の上へ落ちた。空氣は澄んで、光つて、凄じかつた昨夜の雨や雲は何處に行つたかと思はれた。

かれが雨戸を明けた時には、朝日は既に湖の半面を照して居た。「好い天氣だ！好い天氣だ！」かう連呼して、かれはいぎたなく、勞れて眠つて居る女を呼起した。しかし女は眼を覺さう

ともしなかつた。

『もすこし寢かして置いて下さよ』

さも眠さうな甘へるやうな聲で言つて、そのまゝ寢反りを打つて、向うむきになつて了つた。かれは止むを得ず、前の方の雨戸を三枚だけ明けて置いて、ひとりで戸外へと出て行つた。で、少時の間、かれの姿は、湖に臨んだ丘の上に見えたり、漣の静かに寄する汀の畔に見えたり、朝日の斜にさし透つた林の中に見えたりした。路が一方湖水になつて居る處では、かれは傍にある石に腰を懸けて、久しい間、朝日の影の次第に湖水を占領して來るのを見詰めて居た。かれは今まで湖水に向つて起したさまざまの感情を今の感

但し終つたものは今から

情に引比べて考へて見ない譯に行かなかつた。空の晴れたやうに矢張かれの心も晴れて居た。光と歡喜とにかいやきわたつて居た。朝日も湖水も何も彼も皆なかれと歡樂を同うして居るやうに思はれた。

甚くとも一時間位はかれは彼方此方と歩いて居た。子規の啼聲が常に増して冴やかに鈴のやうに聞き取られた。靜かな波の上には、舟が一隻二隻通つて行つて、段々高くなつた朝日は、今や殆んど湖の全面に輝き渡らうとしてゐた。此方の岸の草藪の露もキラ／＼と七色に光つて見えた。

流石に女ももう目覺めて居るだらうと思つて踵を旋したかれは、まだ雨戸が三枚明けたまゝになつて居るのを見た。「もう

起きないか」縁側の處からかれはかう呼び起した。

女はまだ眠さうにして居た。起き上つて、傍にあつた小形の金時計を取つて見て、「貴郎は、いつも早いわねえ、まだ八時ぢやありませんか。……え？もう散歩して入らしやつたの？ぢや仕方がない起きるわ」で、はだけた寢衣を掻き合せて、縁側にだらしなく坐つて、其處に散ばつて居る懷鏡を手に取つた。鏡には亂れた丸鬘と紅粉のはげた顔とが映つた。

「眠さうな顔ねえ！」

かう自分で言つて笑つて、「昨夜はよく寝たわ。矢張勞れて居たのね」

やがて髪に挿した蒔繪の櫛を取つて、髪の後れ毛をかいたり、

前髪まへがみの曲まつたのを直なしたりした。空そらの晴はれたのに、今いま始めて氣き附ついたらしく、『マア、好いお天てん氣きねえ眩くらしいやうだわ』女おんなは櫛くしの手てを留とめて湖こ水すいの方ほうを見みたりなどした。

男おとこは縁えん側がはに腰こしをかけて居ゐた。

信しん玄げん袋ぶくろの中なかには、新しん形がた旅りょ行かう用ようの化り粧しょう道どう具ぐがはいつて居ゐた。鏡かみだの毛け筋すぢだの刷は毛けだの石い鹼せんだの紅べ粉こなだの何ど處どこに何どう入はいつて居ゐるかと思おもはれるやうに、その小ちひさい革かわ製せいの箱はこの中なかから出でて來きた。『これは松まつ島しまにいく時とき買かつたのよ。覺おぼえて居ゐて？』女おんなはこんなことを言いひながら、毛け筋すぢを長ながく兩りやう方ほうの髪かみに挿さして、髪かみかさで髻たな

の亂みだれを丁てい寧ねいに梳すき始はじめた。傍そばには眞しん鍮ちゆうの金かな盥ざらひに湯ゆが汲くんであつた。

『此こ處ちこはお湯ゆは何どうするの？宿せど屋やまで行いかなくつては入はいれないの？』

『いや、其そ處ちこに湯ゆ殿どのがあるよ。いつでも立たてられるやうになつて居ゐるよ。』

『さう？』

熱あつ心しんに髪かみをかかきながら、『では、今いま日は立たて、賞あひたいわね。お湯ゆに入はいらないと何なんだか氣き持もちがわるいわ。……貴あなたは今いままで何どうして居ゐて？』

『一人ひとりで立たてるのも面めん倒たうだから、僕わがは宿せど屋やまで出でかけて行いつた

がね。………立てるのは譯はないよ。樋さへかければ山から水が来るやうになつて居るから』

『さう？』

見る見る女の髪は綺麗に成て行つた。毛筋を取つて二三度梳ると髪はふつくりと結立のやうに水々しいふくらみを出して來た。毛筋で撫でた鬢には新しい筋がくつきりと鮮かに立つて見えた。

紅粉下を傳けて、紅粉を塗つて、さて小刷毛でそれを撫でると、顔は見違へるやうに柔かな落附いた色を帯びて來た。女は今一度合せ鏡をして、後の鬢の具合を見て、是で好いと言つたやうに、バタバタと鏡臺を疊みにかゝつた。襟をかき合せた派手な

中形が殊に其姿を艶に見せた。

『お綺麗になつたでせう？』

わざとこんなことを言つて男の方を見て笑つた。

今日に限らず男はかうした場合には、いつも女の媚に對して、一種の軽い憎悪を覺ゆるのが常であつた。それは自分の力で女の總てを占有することの出來ないのを憎むやうな心持でもあれば、其力に捉られるのを自ら腹立しく思ふ様な心持でもあつた。他の男に對する嫉妬に似た情も交つて居た。男に捉へられない女の自由を憎むといふ様な心も交つて居た。

『いくら綺麗になつたつて駄目だ。僕のものには何うせなら
ないんだから』氣が付くと男はかう言つて居た。

『さう？ 貴郎のものぢやなくつて？ 貴郎の私ぢやなくつて？』
 男の顔をじつと見て、『まだあんなことを言てるんだもの。私
 本當に厭になつて了ふわ。こんなに迄しても私の心は解らな
 いのかしら。』

かれは別にそれを辯解しやうともしなかつた。女が立つて
 鏡臺や化粧道具を片附けるを見ながら、別れの手紙を出した時
 の心持などを考へて居た。

しかしそれも僅かの間であつた。二人はやがて睦しさうに
 伴れ立つて湖水の方に出懸けた。

十一

女は絶えず異つた態度と表情とを見せて居た。衣服や化粧
 の具合で、肩がほつそりと柔かに見えたり、顔が蒼くヒステリク
 に見えたり、姿が生々と快活な風に見えたりした。眼の周囲は
 濃い影の生ずる時には、其心が相手の心にじつと浸み込まなけ
 ば止まないやうな一種の潤ひを持つて居た。

時にはまた非常に醜く見えることもあつた。思ひ屈してつ
 かれ果てたといふやうな表情をする時には、口が際立つて大き
 く見えた。髪の毛の濃いのを誇りにして居る女とは思はれな
 いほど艶のない衰へた氣分を起させることなどもあつた。

心の明暗がこれほどその態度に影響を見せる女も滅多にな
 かつた。潮のやうな心の干満——其處に單純でない見透かされ
 ない捕促すべからざるエキस्पレーションが働いて居た。

形はどちらかと言へば、好い方ではなかつた。すらりとはし
 て居たが、ヤ、細りし過ぎて居た。唯襟筋の長いのと髪の見事
 なのとが僅かにそれを償つて居た。

中でも一番特色を持つて居るのは、その黒瞳勝の眼であつた。
 それは日の光に由つて絶えず其色を改める海の波のやうに時
 によつて明るくもなれば暗くもなつた。心持の好い時には滑
 かでやさしく何の波濤を起しさうにも見えないが、不機嫌の時
 には暗く皮肉な愁を帯びて、容易に料り知られないやうな深い

秘密を包んで居た。かれはいつも其處に影と日向との巧に織
 込まれて居るのを認めた。

密樹の陰で見ると、女は中でも際立つて美しかつた。柔らかな、
 薄暗い空氣の中に見ると、輪廓は、明るい湖畔などで見るものとは
 全く趣を異にして居た。男が水色のハンモックを樺の林の中
 に吊つて、書など見て居ると、女はいつも其處に遣つて来て、樂し
 さうに笑つて話し懸けた。

その時は、眩度林の間を洩れて、美しい日影が濃淡の縞を織り
 出して居た。涼しい風が浴衣の袖を吹いて通つた。

『それは何ですか？』

かう言つて、男の手から洋書を取つて、わざと頁を翻へして見

たりなどした。

ある書の挿書には、男と女とが抱き合つて居るものなどもあつた。じつとそれに見入つて居た女は、『これは小説？』から言つて男の方を見て、『何うして居るの？これは？』などと訊ねた。

『貴郎、本などを見て居るのはおよしなさいよ』

かう口に出してこそ言はないが、眼は常にさうした意味を語つた。かうした山の中に来て、獨りで放つて置かれるのが女には殊につまらなさうに見えた。

『貴郎、瀧でも見に行きませうよ』

時にはかう言つて男を伴れ出して行つた。

十二

都會の明るい灯や響や音楽や、さういふ空氣の中に朝夕を送つて居た女に取つては、林の中の生活は、やがて單調に退屈に思はれるやうになつて來た。湖水も、山も、静かな天然も、一日二日經つ中には、始めのやうな色彩を其眼に與へなくなつて了つた。それに、女は普通の女のやうに、落附いた静かな單純なところがなかつた。聴かしげに覗いた青空のやうに美しく晴れたかと思ふと、すぐ後から鬱陶しい雲が襲つて來た。『何うして、私は、かう氣分が變り易いんでせう』かう女は常に口癖のやうに言つて居た。

「本當に自分ながら、自分の心が解らなくなるのよ。一體私の星が悪るいんだわねえ。三碧といふ星は、誰も皆なかうなんですって……厭になつて了ふわ」男はかうした言葉をよく耳にした。

かれが見て居ても、可哀相に思はれるほど鬱ぎ込んで居る時
もあつた。その時は機嫌を取つても効がなかつた。黙つて蒼
い顔をして、碌々口も利かずに居た。これが何うしてあのやう
な快活な明るい調子を出すことが出来るかと不思議に思はれ
るほどであつた。
寧ろその複雑した對照が、女の眼を美しくし、女の心を美しくし、女
のスタイルを美しくして居た。始めは男はそれを唯變つた不

style

思議な心の姿とばかり思つて居たが、今ではもうさう簡單には
思はれなくなつて居た。その明るい暗い心が、びつたりと男の
心に絡み著くやうになつて居た。
さうした社會によく見る女のやうなうは氣な移り氣な處は
あつても、一方には何處か眞面目な眞率なところがあつて、それ
が女の心を一層複雑にして見せた。
女は以前にもその幼い生立を話して聞かせた。何不足ない
町娘で育つて、藥師の夜の縁日には、近所の若者の評判にも立て
られ、踊の師匠への行きに歸りに、その派手な姿は行かふ人の眼
をも惹いた。
「今でも、其處を通ると、昔の藏がちやんと残つて居るのよ」そ

の話をする時は、女はいつも聲を曇らせた。

一日一日とさびしい湖畔の生活は續づいた。夏は段々暑くなつて行つた。昨日は少し先きの別荘に西洋人が一家族遣て来て、閉め切つた門は明け放され、窓には白いカーテンや簾がかけられ、子供が二三人物めづらしさうに門の處に出て此方を見て居た。夕方には十八九になる娘の弾くピアノの音が徐かに水を渡つて聞えた。

『西洋人が来たのね……それは可愛い子が居るのよ。私がさつき其處を通ると、ここにこして立つて居ますから、此方からも笑つてそばに寄ると、小さい方がね……さうね、五歳位の子よ、女の子よ、それが私の方に飛びついて来るんでせう。私本當に可

愛ゆくなつて了つて、すぐ抱いて遣つて、いろ／＼あやしたり何かしてゐると、ちぎ、その門の中に母さんらしい人が見て居て私の方に来て何か言ふんですけれども、ちつともわからぬのねえ……本當に西洋人の子供は可愛いわねえ』散歩から歸つて来た女は、かう言つて、『私子供が欲しいわ』

『さうかね、お前などでも子供が欲しいことがあるかね？』

『それはあるわ』女は片頬を笑ませて、

『可愛い子供を見ると、私にもあんな子供があつたら、と思つて、考へるわ。そりや商賣をして居る中は、出来ては困るけれど、一

生子供はないのかと思ふと、心細くなることがあつてよ」

「さうかな、僕はまた子供など欲しくはないと思つて居た」

「女はさうは行きませんよ」

「さうかな、して見ると女は矢張子供が一番大切なんだね。子が無つては、生きて居る効がない様な気がするんだね？」

「さうかも知れませんよ」

男は考へるやうな眼付をして女の顔を見つめて居た。

暫くしてから、

「とてもお前には子供は出来ないね」

「さうでもなくつてよ。かういふ商賣をして居ても出来て仕方がない人さへ随分あるのよ」

「しかしお前には出来さうもない」

「何故なの？」

「男に捉へられないやうな處がある女には、子供が出来ない」

と女は男の心を讀む様にして笑つて、

「ぢや私は氣だと言ふのね？」

「さうぢやないけれど、お前の心持には、何處かから男に底を見透されまいといふやうな氣分がある。何處までも自由で居たいッていふ様な處がある。さういふ風な女には子供は出来ない様だね」

「そんなことはありませんよ」

「ないことはない。僕はいつもさう思ふよ。女は男にすつか

り心と體との全部を任せて了ふやうでなくつては、子供は出来
ない』

『さう？』

かう言つて女は黙つて考へて居た。

『その證據には、お前は心と體とをすつかり男にまかせて了つ
たやうなことはあるまい？』

女はまだ黙つて居た。やがて、

『ぢや、まア私は心から惚れた人がないといふ譯ね？』わざと
らしい笑ひ方をして、『さうかしら？……さうね……さう
言はれ、ばさうかも知れないわねえ。貴郎にだって心から惚
れて居るッて言ふ譯ぢやないかも知れないわね。』真面目なや

うな戯談なやうな眼付をして、

『何故私はかうでせう？ 疑ひ深いんですかねえ』

『疑ひ深いのは違ふよ。……随分熱心にはなるんだよ。し
かし何處かかう氣が定まらないやうな處があるね』

『さうですかね。性分ですかね』かう言つた女の顔には一種
苦しさうな表情が歴々と見えて居た。すぐ、『何うして、こんな
性分に親が生みつけて呉れたんでせう？ 詰らない！ 詰ら
ない！ いくらひとが惚れて居てもさう思はれるんだもの。
私の顔や心持がさう出来て居るんだから』投げるやうに、『子
供なんか要らないわ。男なんか頼りにならない！ 私は一生
ひとり商賣して暮すわ』

互に心を合せやうとするやうな努力が常にかれ等の間に働いて居た。黙つて顔を見合せて居る時間を二人は成たけ避けるやうにした。

それは猜疑と不安との時間であつた。觸れ合ふ眼と眼とは、互に其心の底を讀まうとして居た。然し幾ら打割て見せても、まだ觸れ得ない心が底に残つて居た。

二人の戀は普通に見るやうな簡単な熱い烈しい戀ではなかつた。

『何うして、さう貴方は薄情でせう？』

かう言つた女の言葉は男に對する女の要求をまだ十分に言ひ現はしては居なかつた。

男はまた男で、さも心のさびしさに堪へ兼ねたやうに、『黙つて捨て、行くやうなことはもうないね？ もうそんな間柄ではないね？』かう言つて女の手を握つたりなどした。然し矢張心の底では、まださういふ風に女を信じては居なかつた。

ある時男が、

『かうして居てもつまらないだらう？』

かう訊くと、

『何うして？』

『何うしてッて言ふ譯もないけれど………何だかつまらなさ

うだから……」

『つまらなさうに見えて？』

かれは笑つて點頭いて見せた。

『そんなことはないわ』

かう言つたが女は矢張つまらなさうに退屈さうにしてゐた。

倦怠疲勞——そこから戀のにげて行くのをかれ等は恐れた。

強い抱擁烈しい接吻、それでなければ二人は満足を得難たか

つた。その瞬間に於てのみ二人は底の底に觸れたやうな氣がした。

はなやかな賑やかな町の灯、人の心を耽溺の底に引張つて行くやうな音楽の調子、自由な、派手な、放蕩な生活さういふものが、

下
附
録

女の黙まつてさびしさうに物思はしげにして居る顔や態度の背景をつくつて居た。そしてその背景は常に女をかれから奪ひ去つて行く大きな力の一つであるやうに男には思はれた。

別れの手紙を書いた時の氣分を男は時々繰返した。女が此處に来てからも、慙くとも二三度は男はそれを言ひ出した。しかしそれを言ひ出す時は氣分の爽かな、軽い心持の時に限つて居た。その言葉も半は戯談、半は皮肉と言つたやうな、軽く軽い調子を帯びて居た。それに引替へて互に黙つて居る時には、強くそれが男の胸に響いて來た。女がそれを思つて居ない時でも、さう思はれて仕方がなかつた。

しかし女もそのことを思ひ出さないでもなかつた。さうし

た經驗を多く持つて居る女に取つては、一人の男から他の男に移つて行くことは、さう大して問題とするに足りなかつた。寧ろ一つの男の心よりも無数の男の心を占領することを女性の矜恃としてゐた。女は、湖水のほとりを歩きながら、さうしたことを一人で考へて居ることなどもないではなかつた。

男の心と女の心とは、絡み合つて、纏れ合つて、そして常に離れやうとして腕いて居た。

静かな林の私語が二人の周圍にあつた。

十三

瀧壺の見える處へと二人は下りて行つた。落つる瀧の音は人語を辨せぬほどに凄しく四邊に反響して聞えた。

路の盡きた處には、危険を拒ぐための柵が嚴重に結び廻してあつた。二人はそれに凭りかゝつて瀧壺を覗つた。

飛沫と霧との底に碧い淵が恐ろしい口を開いて居た。

二人は何も言はなかつた。女の手はいつか男の手を堅く握つて居た。死——今まで起したことの無い死といふ恐ろしい念が同時に二人の胸に上つて來た。

二人は顔を見合せるのを恐れた。

『もう行きませうよ』

暫くして女はから男を促した。

男は黙つて立つて居た。死でなければ完全に女の愛の全部を占領することが出来ないといふことを考へて、かれはアツとした。無数の性を呑んで猶平然として落ちてゐる瀧は、更にこの離れ難ない一致し難い二つの體を呑むべく用意してゐるやうに見えた。

『もう行きませうよ、貴郎』

女は再び繰返して言つた。顔には神経の顫動が歴々と見え居た。

男はそれでもまだ黙つて瀧壺を覗いて居た。飛沫は上つて

は晴れ、上つては晴れた。昨日も男が此方の女中を手招きして勢好く飛び込んだといふ落口の柵が黒くかれの眼に映つた。

『後生ですから、行きませう』

女は泣きさうにして言つた。

阪を登る時女の脚はふるぶると戦えた。男は先に立つて手を引いて遣つた。瀧の上の休茶屋に來ても、女は猶その恐怖の念を捨てなかつた。『御覽なさい、ほら、こんな動悸』早鐘を撞くやうな其の胸に男の手を當てさせて、

『ひどい動悸でせう？』

かう言つて女は男の顔を見た。

『何もそんなに怖がることはないぢやないか』

『だって、怖いわ』

『何うして、今日はそんなに怖んだらう？ 此間はそんなことはなかつたぢやないか』

『さうねえ、此間は怖いなんて言はなかつたわねえ』

女の顔は白く且つ蒼かつた。唇も色を失つて居た。男は四五日前に女と初めて此處に遣つて来た時、『此處から一緒に落ちて死にませうか』と快活に言つた女の言葉を思ひ出して、それを今の状態に引較べて考へた。

女中の運んで来た茶は温かつた。女は氣になるやうに、女中を捉えて、昨日飛込んだ男の話を詳しく訊いた。『いやだわねえ、そんな處を見てゐて、姐さんは氣味がわるくなくつて？』

『もう度々見つけてをりますから』

『だって、氣味がわるいねえ……』間を置いて、『何だって、手招きなんて、そんな真似をするんでせう？ でなくつてさへ、後を引くものだつて言ふぢやありませんか。厭なことねえ？』女は不氣味さうに美しい眉を蹙めた。

『もう歸りませうよ』

女はかう男を促し立て、急いで恐ろしい瀧の畔を去つた。林の中から明るい湖水の見えるあたりに来るまで、女は男の手を離さなかつた。

十四

男は藤椅子に凭りかゝつて、凝と女の方を見て居た。

女は湯上りの艶な姿を、夕暮近い庭に見せて、静かに歩いて居た。涼しい風が灌木の林を絶えず吹いて通つた。

何うすることも出来ないと言ふやうな考が男の頭腦を頻りに往來した。女が此處に来てから、もうかれこれ十日にもなる。しかし状態は依然として元のまゝである。同じ不安、同じ不満、同じ動搖——。

何ういふ風に結末をつけて行くか。何う云ふ風に新しい路が開けて行くか、かれにはそれが解らなかつた。解らないのが、

かれには辛かつた。

「商賣などをやめて、早く一緒にになりたいねえ。……始終中盤に結つて居たら、うれしいでせうねえ。」女は此處に來ない前にも度々かうしたことを言つた。女からかれによこした手紙にも、「何時一緒にになれるでせうね、私の心をすつかり貴郎に見せる時は何時來るでせうね。早く、早く其時が來れば好い」などと書いてあつた。かれ自からに取つても、何うかして、完全に女の體と心とを自分のものにしたかつた。競争者から安全な地位に移して、朝に夕に其眼、其眉、其髪を見て居たかつた。……それが出來ない位なら、寧ろこの二人の間を破壊して、全く路頭の人になりたいたまで思つた。

十日間——甚くとも其十日間はかれは女を獨占することが出来た。其眼其眉其髪を常に自己のものとして眺めることが出来た。しかしそれが何であつたらうか。それがいかなる効果を齎らして来たであらうか。またそれが何んな新しい路をかれ等の前を開いたであらうか。

ある希望を満し得た刹那の歡喜以上に何等の意味ある發展を來したであらうか。

依然として女の心は女の心、男の心は男の心、女の體は女の體、男の體は男の體ではなかつたらうか。

心はすぐに離れることが出来るではないか。いかなること考へる自由をも有してゐるではないか。

女はすぐ他の男を思ひ浮べることが出来るではないか。

こんな風に思つて居るかれの眼の前には女を崖から突落した男だの女の横腹に鋭利な出刃庖丁を突き刺した男だのが歴々と浮んで通つた。昨日、瀑壺を覗いた時の女の恐怖も點頭か

れた。一方ではまたかうした力に縛られて、何うすることも出来ない其身が繰返して考へられた。『もう駄目よ、そんなことを言つたつて駄目よ』かう言つた女の言葉も思ひ出された。

其處に躊躇んで花を探つてゐる女の方をかれは再びじつと見た。

女は男がさうしたことを考へて居るとは夢にも知らず、やさ

しい美しい笑を顔に湛えながら、折り取つたおいらん草の紅と白とを組み合せて、それを黙つて物を考へて居る男の胸のところに挿した。半ば捲られた女の腕は白かつた。

「何を考へて居るの？」

「何にも考へて居ない。」

「嘘！ 考へて居てよ。」男の顔をじつと見て、「そら考へて居るぢやありませんか」

「……………」

「ちやんと解つてよ」

男は猶黙つて女の方を見て居た。

「つまりないことを考へるのは、およしなさいよ。」おいらん草

の束ねたのを襟の處に骨折つて挿して、「貴郎も随分神経家ね」男が猶黙つて居るのを自烈度さうにして、「何處かに行つて見ませうよ。そんなにして寝てゐたつてつまらないわ」

女は丸鬢が壊れてから、自分で器用に庇髪に結つた。それが一層女を素人にして見せた。都會に居る間は、滅多にそれに結つたことはなかつた。庇髪は、下町の座敷には伴はなかつた。

「今日は旨く結えたでせう？」

女はわざと男の氣分を引立たせるやうにして、後を向いて髪を見せた。

何故か今日は男は深い沈思から急に浮び上がる事が出来なかつた。女に強ゐて誘はれて散歩に出ても、快活に笑つて話

をする気分になれなかつた。

心も體も疲れて居た。あらゆる束縛から離れたいといふやうな佗しい心持と飽まで歡樂を追求めしやうといふやうな熱した心持とが一緒になつてしつこく絡みついて居た。男は唯女の話しかける言葉を點頭いて聞いて歩いて居た。

歡樂の満足と慾求の満足とは、男に取つてまだ十分な満足ではなかつた。其處に猶ほ何か深いまことの意味が要求された。眼、眉、髮肌、それに其身の總てが占領されて了つた時の心は、暗くもあり、重苦しくあり、佗しくもあつた。世界が丸で別の世界のやうにも見えた。それに引かへて女は心も體もすべて男にまかせ切つた時に於てのみ唯幸福であるといふやうに見えた。

其時に於ける女の笑ひ——その笑ひを男は時々思ひ出した。

それは黄いやうな感じのする笑ひであつた。その笑ひの底には、恐ろしい影がひそんで居た。他界から微かにさして來たやうな影がひそんで居た。それは死に近い影であつた。

「歡樂の國」といふ名書を曾てかれは見たことがあつた。背景をつくつて居る光線には、一味の深い悲哀と暗い幽鬱とが藏されてあつた。満すべからざる歡樂の不滿が常にかれを根柢から惱した。

女が物思ひに沈んだやうな顔をして居る時には、男は常に同情を持つた心持になつて居た。それと反對に男が疲れ切つた不安な顔をして居る時には、女はそれを慰藉する様なやさしい

態度を取った。

三十八

十五

女は時々都會の夜の灯を思ひ出した。「今頃は東京は賑やか
 でせうね……」かう言つてはいつもさびしさうな顔をした。
 湖畔の町へは、それでもよく出懸けて行つた。晝飯などを食
 ひにも行つた。旅館の室は多くは湖水に臨むやうにつくられ
 てあつた。其處には、卓が据ゑられて大きな花瓶に山の草花が
 一杯に投げ込まれたやうにしてあつた。
 西洋人が二人づれで睦しさに湖水を指して何か語り合つ
 て居ることなどもあつた。ある日行つた時には、貴族の子息で
 もあらうと思はれるハイカラな若い男が、新婚らしい庇髪に結

つた細君を伴れて来て居た。眼の綺麗な色の白い頬の豊かな女であつた。卓に凭りかゝつて、ペンで頻りに繪葉書を書いて居た。

『私も繪端書が書きたいわ』

女は甘へるやうにして言つた。

『何處へ出すんだ？』

『好いとこよ』

やがて繪端書は取寄せられた。それには町の家並だの瀧だの歌が濱から見えた男體山だの中宮祠の前から見えた湖水だのがあつた。女は其處に置いてあるペンを取つて、わざと品を綺麗な横顔を向うの二人に見せるやうにして、繪端書を書いた。

それは多くは簡単な暑中見舞であつた。『私此處に来てますのよ。さびしい處ですの』などと書いたのもあつた。平生最良になる客に充てたのもあつた。男は一枚々々それを翻して宛名を見た。

最後の一葉は手に取つて見えないやうにして書いた。書きながら時々此方を見て笑つた。で宛名を書き終ると、すぐそれを自分の懐に入れて了つた。

『お見せ』

それを見て居た男は笑ひながら手を出した。

『いゝのよ』

女は初めは笑つて言ふことを聞かなかつた。

「見せたッて好いちやないか」

「ぢや見せるわ」

女は懐からそれを出して、澤山繪端書の重ねてある處に置いた。番地様と表面にしてあつて、「御機嫌やう御座いますか、お體を大切に」と書いてあつた。女は笑つて男の顔を見た。男も笑つて居た。

「よくつて？出してでも？」

「わるくつたッて仕方がない」

男は別に機嫌がわるいといふ風にも見えなかつた。

「貴郎も何處かへお出しなさいよ」

「僕は何處にも出す處がない」かう言つたが、その端書を取つ

て、「僕も此處に署名してやらうか」

「え、」

女は笑つて居た。

「本當に好いか」

「さ、わ」

「まア氣の毒だからよして置かう」

「いゝのよ、本當にいゝのよ構ひはしないわ。」

男は自分の名でない名を其處に書いた。女は呼鈴を鳴して

女中を呼んで、それを一まとめして出させた。

新婚の二人は此方を見て居た。

「ちよいと来て御覽なさい」
 食事を済して、欄干に凭り懸つて、湖水を見て居た女は、かう言つて男の方を振り返つた。

其處には、湖水を遊覽する一隻の舟が今出やうとして居た。一番最後に遣つて来た派手なつくりをした女が慌てゝそれに乗ると、舟はゆるやかに雁木から離れた。熨したやうに滑らかな碧い湖水には、船頭の漕ぐ櫓の痕がたぶたと日影に光つて見えた。

男が三人女が二人、それに十歳位になる女の兒が乗つて居た。麥酒の罎や菓物や茶道具などが載せてあつた。舳尾の方に置かれてある七輪の鐵瓶の中には、徳利が小さく見えて居た。

流石に日ざしが暑いと見えて、男の一人は新しい手拭で頬かぶりなどをした。面白さうに楽しさうに笑つて話しをして居るさまが、手に取るやうに此方から見えた。舟が少し出た處で、最後に乗つた女は、目の覺めるやうなお納戸色の蝙蝠傘をばつと開いた。

旅館の二階三階からはそれを見て居る人が多かつた。新婚の二人も矢張欄干に凭りかゝつて見て居た。

「面白さうね」女は男に云つた。「向うに見物するやうな所があるんでせうか？」

「それはあるさ。歌が濱だの、合瀉だの、上野島だの……」

「島があるの？」

「島ッて言ふほどではないが、此山を開いた人の墓のある處がある」

「此山を開いた人ッて………矢張坊さん？」

「それはさうさ。勝道上人ッていふ」

「行つて見たいわねえ」

「ちき舟に酔ふ癖に……」

「いゝえ、私は舟は大丈夫よ。小さい時分に、神戸から父さんや母さんと汽船で横濱に來たことがあつたけれど、ちつとも酔ひはしなかつたわ。今でも覚えてるわ。」靜かに湖上を漕いで行く舟の方を見て、「行つて見ませうよ。ね、貴郎？」

「此處の湖水は深いよ、落ちると大變だよ」

「大丈夫よ」

「ぢや落ちて死んでも知らんよ……。それでも好いかえ？」

戯談らしく男が言ふと、

「いゝわ、死んでも、貴郎と一緒になら」かう言つて女は笑つた。

見ると舟はもうかなり沖に出て居た。派手な蝙蝠傘は晴れた水の光に映つて丸で繪か何ぞのやうに見えた。其の向ふには斜に帆を揚げたボットが一隻通つて行つた。對岸の森の中

の西洋人の別荘だの、寺の屋根だのが分明と指さされた。

湖に臨んだ家々の雁木は棧橋のやうに長く湖水に突き出して居た。旅館から其處に行くには、大きな厨の傍を通つたり、炭や薪の置いてある物置の側を通つたりしななければならな

つた。雁木の上では櫓がけになつた女中がせつせと物を洗つて居た。湖水は透徹るやうに澄んで、日影のナラナラする底に小石が碧く數へられた。暫くしてから、二人は其處に下りて行つた。

花莫菴を敷いた新しい荷足が一隻準備を整へて其處に待つて居た。

二人を乗せた船はやがて出た。

樓上樓下の客は皆それを見送つた。笑つて何か噂し合つて居る人達もあつた。欄干に凭つて此方を見て居る新婚の二人

の姿は、沖に出るまで小さくなつて見えて居た。

女は樂しさうにして居た。白い腕を惜しげもなく見せて、舟縁に凭る様にして、綺麗な水を弄んだりなどして居た。をりをり寄せて来る波に驚いては、『まア、ひとひ』などと言って笑つた。

碧い水の堆積は、湖水のいかに深いかを思はせるに十分であつた。『この湖水は深いですねえ？』かう言つた女の言葉につれて、中年の眇目の船頭は、いろいろなことを話して聞かせた。無数の埋木が底に沈んで横はつて居る事だの、大きな山椒魚が澤山住んで居る事だの、昔から深さを量つたものがないといふことだのを話した。

『だから、此處で死んだものゝ死骸の上つたためしがありません』

んヤ

船頭は軽く櫓を押し乍ら續いて昨年溺死した西洋人の話を
して聞かせた。

「怖いわねえ」

女は水に浸した腕の雫をハンケチに拭ひながら「それで、と
うとう死骸が上らなかつたの？」

「西洋人ですから、随分お錢をかけたんですけれど……」船頭
はかう言つて「その時は、それは騒ぎでしたせ、中禪寺の舟は皆
な出拂つて了つた位でしたせ……それでもとうとう解りませ
んヤ」

船頭は少し来たところで柱を立て、帆を揚げた。それはつ

ぎはぎの眼に立つて見える汚い帆布であつた。涼しい風が人
々の袂に吹いた。

舟は岸を遠く離れない處を通つて行つた。朝に夕に散歩し
たところも、舟から見ると趣が全く變つて居た。西洋人の別荘
は密樹の間から椅子や卓を置いた居間だの、ピアノの置いてあ
る二階だのを水彩畫のやうにして見せた。乳母車に子供を乗
せた西洋婦人が長い裾を引きながら通つて行くのが緑葉の間
に見えたり隠れたりした。

ボウトを岸の繁つた樹の間に埋れるやうに繋いで、ひとり
静かに書を読んで居る若い婦人などもあつた。

暫く来た處で、

『そら私達の家が見えてよ』

かう女が男に指した。

成程樹の間から二人の小さい別荘が見えた。誰も居ない六畳の座敷には、午後の日が明るくさし透つて居た。籐椅子の上に置かれた読みさしの洋書の頁が風に翻つて居るのも見えた。其處で過した二人の生活は丸で別人の生活か何ぞのやうに男には思はれた。半月の生活が取あつめて考へられるやうにも思はれた。女にも同時にそれと同じやうな思ひが上つたと見えて、

『此處から家を見ると不思議な氣がしてね』

『さうだね、彼處に雨の降る日にお前が來たとは思はれないや』

うな氣がするね』

『私はまた何だか貴郎が彼處で本を讀んで居るやうな氣がして仕方がないわ』

こんなことを言つて居ると留守居をして居た女中が、やがて縁側の處に其姿を見せた。女は俄かに、『お時さん？』と聲を張上げて呼んだ。ハンケチを振つて見せた。

『ほら、解つたでせう。此方を見て居る。笑つて居る？』
見ると、女中もハンケチを振つて居た。

五六間ほど離れた處を一隻の端艇が漕いで行つた。

「あの人がちやなくて？」

女の眼は逸早くそれに乗つて居る西洋婦人を認めめた。成程それはヘンリツタであつた。まだ年の若い派手なネクタイをした西洋人が一緒にそれに乗つて居た。擡を水の上にあげた舟は緩やかに波に漂つて居た。

樂しげに笑ふ聲が水に響いて聞えた。やがてヘンリツタは何か歌らしいものを聲張り上げて唄ひ始めた。それは冴えた幅のある好い聲であつた。戯れ合つた二つの影は、碧い澄んだ水に捺したやうに明かに映つて居た。

「到頭好いお客を捉へたと見えるね」

此方からそれを見て居たかれは、かう言つて笑つた。

「さうね」女も笑つて、「中々好い男ぢやありませんか」

「さうだね、鳥渡好い男だ。女よりも若いやうだな？」

「さうね」

女はじつと其方を見て居た。ヘンリツタが唄ひ終ると、今度一緒に乗つてゐる男が大きな聲を立て、ひびひらしいものを吟じ始めた。水に映つた影は縫れたり解れたりして居た。

すれ違つた時には、距離が二間位しかなかつた。彼方からも此方を見た。何か囁し立てるやうな聲をかけた。ヘンリツタは綺麗な笑顔を此方に見せた。

「西洋人は暢氣ねえ」

すれ違つて少し來た頃、女は笑つてかう男に言つた。

「あの女唐は、あれで、中々食へた女ぢやありませんヤ」船頭は客がそれと知つて居るとは知らずに、ヘンリツタの事を何彼と話し出した。

「あの向の家を借りて居る女だらう？」
かう遮つて男が言ふと。

「旦那はもう御存じですか。」思ひもかけないといふやうな調子で言つて、「あんな綺麗な虫も殺さないやうな顔をしてゐて、あれで大變なんですから。昨年なんぞ千兩も稼いで行つたさうですからな……それでゐて、客畜いと言つたら……。私達の仲間の家を借りて居るんですけれど、間代きりで心附けなんど忘れてもしやしないといふこつてす」

「此方の言葉は其でも話せるのかね？」

「から、駄目だつて言ふこつてす。ペラ、ペラ、ペラ、何のことアない、豆がらに火がつくやうだつて言ひますが、本當ですな、異人のしやべくるのは」後を振返つて見て、「異人でも、矢張男は女に甘いもんだと見えませすな」船頭はこんなことを言つて笑つた。

二人も笑はずには居られなかつた。

湖の水は餘り冷たい方ではなつた。それでも浸さぬよりはと言つて、載せて來た麥酒の壘を紐に結えて、女は先程それを湖の中に入れた。紐の末を女はしつかりと持つて居た。

「中々重いわ、貴郎少し持つて頂戴」

で男は代つて持つて遣つた。ふと氣が附くと、船は此方から

彼方に行かうとして居た。湖水は今が一番深い處で、四方からさし込んだ日の光線は稜角をなして底に七色の色彩を描いて居た。

樹の影の少ない石の多い上野島には長く留つて居なかつた。女は石に躓いて幾度が轉びさうにした。容易に遣つて來ないのを何うしたのかと男が戻つて行つて見ると、下駄の桁をかけた女は、足袋足蹴になつて困つて其處に立つて居た。

『しやうがないわ』

でも下駄は役に立たないほどでもなかつた。日影の暑い凸

凹した路を、船を繋いだ方へと、女を男が保護するやうにして、やがて静かに下りて行くのが見えた。

船は蔦の蔓の下つたり、荆棘の花の白く咲いたりする岸を縫ふやうにして漕いで行つた。密樹の間を洩るゝ日影は、女の肩から男の膝のあたりに絶えず濃淡の縞を織つてチラチラして居た。二つのコップにつがれた麥酒、古新聞に包んで持つて來られた干葡萄酒―それを女は氣味よく音を立て、嚙んだ。

五大尊のある岸に船が著いた時には、女はもう上陸しないと、言つて居た。でも、男が船頭を案内に立て、岸から續いて居る樹影深い涼しさうな路を彼方に行かうとすると、後から聲を立て、呼んだ。

『私も行くわ』

で、女は船頭の藁草履を結び付けにして穿いて出懸けた。『私こんな草履を穿くのは、生れて始めてよ』行く行く女はこんなことを言つて笑つた。一二杯飲んだビールの酔が發したといふ風で、わざと驅けて先へ行つて見たりなどした。島とは違つて、此處には涼しい蔭が多かつた。男は灌木の林の中に入つて、細い枝を切つてステッキにした。

段々路は細くなつて、熊笹が深く兩側に繁るやうになつて來た。二町位と船頭が言つた路はかなり遠いやうに二人には思はれた。纏てひと處樹の切開かれた處があつて、其處に荒廢した堂宇が見えた。

全く人氣の絶えた堂宇の中に、寂然として立つて居る古びた佛像の姿は、二人の胸に一種不思議な思ひを起させるに十分であつた。女は男に凭り添うやうにして、黙つて其の佛像の前に立つた。

一つの佛像は、ギョロリとした怖い恐ろしい眼をして居た。

一つは暗い影の中に影のやうになつて立つて居た。他の一つは凄い笑を顔に湛えて居た。

『此處には、平生誰も居ないの？』

女は聲を低くして訊いた。その低い聲でさへ、堂内に凄く響き渡るやうに女には氣味悪く思はれた。

何うした機會か、男の胸にも此時神秘な不可思議な氣分が起

つて来た。かうして黙つて立つて居る佛像——雨が降らうが風が吹かうが乃至はいかなる悲惨なことが此の世の中に起らうがこの深山の中の人氣のない堂宇の中に黙つて寂として立つて居る佛像のこの冷静とこの Indifference、それが自分の熱したり悶えたりする動搖した心にある暗示を與へなければ止まないやうにかれには思はれた。また、それと同時にその冷静とその Indifference とが自己のこの苦悶を救つて呉れるやうにも思はれた。

かれは女と自己との關係を考へてじつとして其處に立盡した。

其處等を見て廻つた船頭は、「山の奴等ア、矢張賭博打ちに来ると見える」こんなことを言つて、棚の上に残つて居る蠟燭やマツナの殻などを指し示した。

「夜こんな處に来る人があるの？」

女が驚いたやうにして訊くと、

「え、此の山の中に、木を伐り出しに来て居る奴が澤山あるんですが、さア……」かう言つた船頭はやがて得意になつて山に居る一種の住民のことを種々と話して聞かせた。それは山の奥から山の奥へと木を伐つて暮して行く人達であつた。谷合の深い處に、人知れず小屋掛をして、木材のある中は、其處に住んで居て、なくなる、山から山へと移つて行くのが、其人達の生活であつ

た。

「まア、そんな暮しをして居る人があるの?…」女は一層驚いたやうな顔をして、「それでお上さんも子供もあるんですか?」

「それはさうですとも」

船頭はかう言つて笑つた。

「まア、ねえ、貴郎」と向うに立つて居る男の方を見て、「まだこの先の山の奥に暮して居る人があるんですつて? 厭ねえ、よく怖くはないわねえ」

男はそれでも考へたまゝ黙つて立つて居た。

何うした聯想か、男の頭には此時兼ねて聞いて知つて居る冬嶺行者の話が歴々と浮んで通つた。苦行に苦行を重ねて、それ

あんなに苦しい暮しをして居る人があるの?...

でもまだ心の解脱を得ることの出来ない行者達は、冬の雪の中を侵して、この大きな山脈を峰から峰へと修業をして歩くのが例であつた。手一合などといふ苦行を敢てしたものもあれば、蕎麥粉を雪に交せて食つて、この山の中に冬三月を過したといふ名高い僧侶もあつた。昔は峰から峰へ行者小屋が出来て居て、毎年一人や二人この冬嶺行者に出かけて行かないものはなかつたといふ。煩惱執著それから解脱する爲めには人間のあらゆる束縛から逃れ、世間のあらゆる歡樂から離れ、肉體を毀損してまでも、猶苦行を怠らなかつた人達の生活——それがかれの生活に意味あるコントラストをなして考へられた。

今日に限らず、さうした心持になることはこれまでも度々

あつた。盲目な満し難い本能の力に相對する時は、殊にその感
が深かつた。歡樂に向つて熱心に進んで行く心と、努力に向つ
て勇猛に進んで行く心と、其處に全く異つた二つの道があるの
をかれは常に明かに知つて居た。

「煩惱と執着と嫉妬と愛慾とに惱まされた自分の生活と、平和
と信仰と無邪氣と敬虔と和らげられたその人達の生活と……
其の距離は？」

かれは其處まで考へて來て、思はず知らず頭を振つた。

十六

旅館の長い廊下から階梯を下りやうとして、女は思はず聲を
立てた。

「まア」

「まア、めづらしい！」

丸鬚には結つて居ても一目でそれとわかる意氣な女は、矢張
驚いたやうに、かう聲をかけて立留つた。何年にも逢つたこと
のない昔の友達は、急に言葉も出ないといふ風で、暫しは黙つて
其處に立つて居た。

「まア、本當にめづらしい！」

「まア、こんな處で逢はうとは、夢にも思ひかけなかつたわねえ」
二人は涙を滴さぬばかり、手を握らぬばかりにして居た。

「何時來て？」

「今來たばかりよ」

「まア、本當によかつたわねえ。……私が此處に御飯を食べに
來なければ、同じ處に居ても、逢はれなかつたわねえ」

「あなたは前から來て居て？」

「ちき其處の別莊に居るのよ」

「旦那様と一緒に？」 笑つて見せて、「好いわねえ」

「貴方は？」

鬚の女は、頷で向ふの方をしゃくつて見せた。

「さう？」 女は點頭いて見せて「今、何處？ 矢張あそこ？」

「今は檜物町に居るのよ。……あれからの話をするよ、それは
大變よ」

「一度引いたことがあつたわねえ」

「それが大變なのよ」 かう言つて「あゝ、じれつたい。緩り話
がしたいわねえ」

「別莊に來なくつて」

「でも……」

「今日歸るの？」

「え……ことに由ると、一晩泊るかも知れないけれど」

「泊つたら入らしやいよ」

「でもねえ」

二人の話して居る傍を、宿屋の女中や番頭がじろく見乍ら通つて行つた。容易に盡ない話を二人は早く手短かに話した。其時分一緒に居た女達の話も出た。

男が厠に行かうとして、階級を下りて行つた時にも、まだ其處に立つたまゝで女は熱心に何か話をついで居た。厠から出て来た時には、女は笑を含んで此方を見て居た。鬚の女も鳥渡振返つて白い綺麗な顔を此方に見せた。

やがて二階に上つて来た女の顔には、涙の痕がそれとなく見えて居た。男の訊くのを待たず、「私の仲好だつたのよ、あの人は？　まだ私が向ふの土地に居る時分よ。一緒によく抱き

つこして寝たのよ。……本當に緩くり話しがしたいわ」

「何んて言ふんだえ？」

「名前？……元は君子、今は檜物町の春村の奴ッて言ふんだッて」

「鳥渡好い藝者だねえ」

「可哀相なのよ。約束した人とは何うしても一緒になれなくつて、一度引かれて、それも駄目で、また今年の春出たんですッて……稼業はもうつくづく厭だッて言つてたわ」少時考へて、

「一時間でも好いから、何うか出来ないかしら？　話しがした

らわ」

「すれば好いちやないか」

「だッて、向ふに都合があるんですもの……今日歸るか知れな

いッて言ふんですもの』かう言ひかけて、すぐ立つて、下に下りて行つたが、間もなく歸つて来て、『矢張駄目よ。今日歸るんですッて』

女は萎れた顔をして居た。

暫くしてから、

『私も東京に歸らうかしら』

十七

六根清淨、お山繁昌……白衣を着て金剛杖をついた道者の鈴の音は、亮かに谷間谷間に響き渡つた。

舊曆の七月一日から七日間の山開き、殊にその最初の日は賑かであつた。お山の日の出を拜まうとする人達は、前の日から湖水に臨んだ町へと群を成して押寄せて来た。社務所の軒には注連が飾られ、白装束をした神官達は其處等を忙しうに往つたり來たりした。日の暮れない中に早くも一杯になつて了つた禪頂小屋の外には、白衣の道者が其處此處に固つて集つて居るのが見えた。鈴の音は後から後へと聞えて来た。

夜になつてからの湖水は、美しく灯にかゝやいて居た。蜃氣樓のやうに俄かに現はれた夜の縁日、あの険しい山路を何うしてこの商人達は登つて來たらうと思はれるほど數多い露店が道の兩側に出來て喧しい呼聲が山の空氣に夥しく響いて聞えた。覗き機關があつたり大蛇の見世物があつたりした。賑かな人々の聲は波の寄せるやうに二人の世離れた別莊にも聞えて來た。其處から見た空は、火事でもあるかのやうに明るく美しく輝いて見えた。

湖水には流燈があつた。それは土地の有志の人達の催しをしたものであつた。二人は大勢の人の中に交つて旅館の二階の欄干からそれを見て居た。岸からも船からも無數の燈が水

の上を流れて行つた。大きいのもあれば小さいのもある。すぐ水に沈んで消えて了ふのもあれば、ゆらゆらと長い間水上に漾つて居るものもある。遠く一つ離れて漾つて居るものなどもあつた。

燈火を流す舟には、酸漿提灯が一面について居た。灯を流す度に喝采の聲が樓上から起つた。

『あの向ふに遠く離れて居るのが、一つあるでせう？ 私見た
いね』

こんなことを女は言つた。

男は笑つて居た。

『私の心に丁度よく似てるわ』

女はじつとそれを見て居た。成程それは多くの灯から離れて一つさびしさうに水に漂つて居た。湖水は黒く光つた。

女はいつか男の手を握つて居た。二三日前から女はヒステリックな気分になつて居た。黙つて眼を赤くして居ることなどもあつた。『さびしいんだらう？　もう東京に歸らうか』かう男が言ふと、『東京に歸つて商賣したつてつまらないわ』かう言つて、一層さびしさうな顔をした。

遠く離れた一箇の流燈は、それでも沈みもせず、長い間水の上をゆらゆらと漂つて居た。誰もそんな方には眼をつけて居るものもなかつた。喝采がまた起つた。見ると青い赤い灯がまた無數に岸に近い水の上に流されてゐた。

『とうとう沈んだわ』

かう言はれて、男が其方を見た時には、もう其處には其灯はなかつた。女は男の手を一層堅く握り占めた。男も黯然として暗い湖水を見た。

女の白い顔に涙の流れるのが夜目にもそれとはつきり見えた。

表ではまた道者が著いたと見えて、鈴の音が町の喧騒に雑つて賑かに聞えた。

十八

「私が素人だつたら、貴郎はこんなにしては呉れませんわねえ」
「何故？」

「何故って……」女は笑つて、「さうよ、それに違いないわ。私が商賣をして居なければ、貴郎は振向いても見ないわ」

「そんなことはない」

「ぢや、私商賣をやめても好くつて？ それでも貴郎は世話を下すつて？」男の心を讀むやうな眼付をして、「それ御覽なさい。矢張駄目だね」

「駄目なことはない」

「さう？ ぢや世話して下さるのね。此間のやうなことはないはなくつてね？」

「此間のことって、何だらう？ そんなことを何か言つたことがあつたかねえ？」

「一緒になつたつて駄目だつて言つたぢやありませんか。一緒になつて毎日顔をつき合せてゐては、戀も何もなくなつて了ふつて言つたぢやありませんか。」

「そのことか」男は思ひ出したやうに言つて、

「だけど、それは本當だから仕方がない。實際、お前だつて商賣をやめた人達が何んな風になつて行くかと平生よく見て知つてゐるぢやないか。」